

せんごくの杜の昆虫 (2022 年調査)

岩崎 拓

CB 大阪 : 〒590-0143 大阪府堺市南区新檜尾台 3 丁 1-3-504

Insects recorded in the satoyama area, Sengoku-no-mori, in 2022

Taku IWASAKI

CB-Osaka : 3-1-3-504 Shinhinoodai, Minami, Sakai, Osaka 590-0143, Japan

Abstract : The satoyama area, Sengoku-no-mori, consisting of secondary woodlands, grasslands, cultivated lands, ponds, and irrigation canals, was located in the hilly area of Kaizuka city, Osaka prefecture. Japanese oak wilt tended to stand out in the forests, recently. Successive surveys were conducted to describe insect fauna and its change in or around Sengoku-no-mori in 2011-2021. Insects observed or recognized by singing were recorded in a certain route of ca. 2-hour daytime walk, once a month from April to December in each year. To improve the accuracy of these descriptions, the number of surveys increased from 9 to 27 in 2022, like the preliminary surveys in 2005-2006. Over 400 species were identified, and number of the threatened species selected in the Osaka Prefecture Red List were 6 (5 species of Odonata and one of Orthoptera), ranked as near threatened, in 2022. For example, in Odonata, *Ceriagrion melanurum* and *Sinictinogomphus clavatus* were observed every year since 2011 and 2016, respectively. It was the first time that *Deielia phaon* was observed in this series of surveys, although some specimens of this dragonfly collected in Sengoku-no-mori were kept in the Kaizuka City Museum of Natural History. *Sympetrum frequens* was observed almost every year except the 4 years from 2014 to 2017. These threatened species, other indicator species of grassland or environmental change, and alien species, were summarized by each order. It might be due to the increase of surveys that the grasshopper, *Gastrimargus marmoratus*, was observed as indicator species of grassland, and might be related to the Japanese oak wilt that *Gempylodes lewisii* was first identified, which was known to prey on bark beetle larvae. Recently invaded species included the ricaniid planthopper, *Ricania shantungensis*, the lady beetle, *Synona consanguinea*, the leaf beetle, *Laccoptera quadrimaculata*, and the carpenter bee, *Xylocopa tranquebarorum*. The current condition of Sengoku-no-mori, was characterized by the lack of grasslands, except for the Japanese oak wilt. This should be taken into consideration when deciding how to use vacant land.

Key words : insect, fauna, threatened species, satoyama, Sengoku-no-mori

はじめに

貝塚市の中央部に里山的景観が残された「せんごくの杜」周辺は、カシノナガキクイムシによるナラ枯れ、ナラ枯れした樹木等の伐採、千石荘病院跡地の更地化、外周路の開通、牛神池の水位低下、カエントケの発生など、自然環境が大きく変化しつつある。前回の報告書では、そのような環境下での 2018 年から 2021 年までの 4 年分の昆虫相の変化を示した（岩崎、2024）。

キイトトンボ、ウチワヤンマ、アキアカネ、ナツノツヅレサセコオロギのような大阪府レッドリスト種が継続して確認されているものの、この 4 年間でチュウゴクアミガサハゴロモ、ムネアカオオクロテントウ、ヨツモンカメノコハムシといった外来種の侵入も新たに確認されている。また、アカハネオンブバッタが在来種のオンブバッタと入れ替わり、あるいは外周路の貫通に伴って繁殖したオオブタクサに外来種のブタクサハムシが再度の大発生をするなど、植物も含めて外来種が目立つようになってきている。現在のせんごくの杜の「里山」としての特徴は、草原の少なさであり、更地にされている箇所の利用には、このことも考慮される必要があるだろう。

以上の結果をまとめた際に、2011 年から実施してきた 4 月から 12 月まで月 1 回の調査では、昆虫相の把握に関して精度が低いことが示唆されたので、2022 年は、2005 年と 2006 年に実施したように（岩崎、2006 など）、4 月から月 3 回の昆虫調査を行うことにした。

調査方法

貝塚市名越、橋本、および熊取町七山北にまたがる全長約 1.2km の周回コースを設定し（図 1）、2022 年の 4 月から 12 月まで、月に 3 回のペースで、合計 27 回、雨の日を避けて調査を行った。

せんごくの杜調査地は、メッシュコード（環境庁、1997）が 51354299、標高は約 45～65m の間である。調査ルートは、2011 年度からほぼ同じで、ロータリー付近（ケヤキ広場）から切通しを南西方向に抜け、水田地帯の中を南下し、ボタン池の土手を経て、雑木林に入り、大樹の森を経て、牛神池の左回りに一周し、周回路を通過して、スタート地点へ戻るコースを設定した。先に述べた外周路は、大井谷池の東辺を南北に伸びるように貫通する整備道である。

調査コース中の大井谷池周辺（図 2）、周回路の林縁（図 3）、および水位が低下した牛神池の景観を示した（図 4）。そのコースを約 2 時間かけて歩き、主に見取り法を用い、鳴き声で種を判断できる場合は記録に加えた。

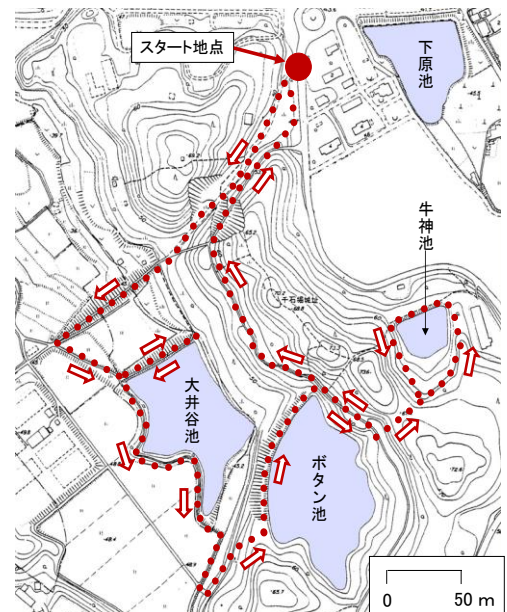


図 1. 千石荘における昆虫調査ルート

点線が調査ルートで、矢印は進行方向を示す。
（一部、往復ルートを含む）



図 2. 大井谷池周辺の景観
(2022 年 7 月 1 日)



図 3. 林縁の景観
(2022 年 5 月 16 日)



図 4. 牛神池の景観
(2022 年 8 月 16 日)

結果および考察

2022 年の調査結果を、大阪府レッドリスト種や注目種を中心に、2005 年以降の結果（表 8 参照）と比較しながら、目ごとにまとめた。各調査日の主な結果は、画像も含めて速報として本報文末に掲載した。学名は表 9 にまとめて示した。

1. トンボ目

大阪府レッドリスト種であるキイトトンボ、ウチワヤンマ（図 5）、サラサヤンマ、コフキトンボ、アキアカネ（ランクはいずれも準絶滅危惧）を含む、計 20 種のトンボが確認された（表 1）。20 種という種数は、2005 年以降における自身の調査では最多の種数である。キイトトンボ、ウチワヤンマ、アキアカネの 3 種は前回の 4 年分の調査報告（岩崎、2024）で毎年確認された種でもある（表 8 参照）。アキアカネの確認はこれまで、11 月に限定されていたが、今回の調査では 10 月と 12 月にも確認された。



図 5. ウチワヤンマ
(2022 年 7 月 21 日)

表 1. 2022 年 4 月から 12 月にかけて、せんごくの杜において確認されたトンボ目

「○」印は成虫、「殻」は羽化殻による確認であることを示す。

科	種	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		5日	18日	23日	3日	16日	22日	2日	10日	20日	1日	11日	21日	1日	13日	20日	2日	13日	24日	2日	13日	21日	5日	11日	22日	2日	10日	25日
カワトンボ科	ハグロトンボ										○			○														
アオイトトンボ科	アオイトトンボ								○		○		○	○		○	○		○									
	オオアオイトトンボ							○						○						○		○	○					
イトトンボ科	キイトトンボ							○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○									
	アオモンイトトンボ																		○									
サナエトンボ科	ウチワヤンマ										○	○	○	○														
ヤンマ科	ギンヤンマ				○	○	○				○	○	○			○	○	○	○									
	クロスジギンヤンマ													○						○								
	サラサヤンマ							○																				
トンボ科	シオカラトンボ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								
	シオヤトンボ		○		○																							
	オオシオカラトンボ							○	○		○	○	○	○	○	○		○	○									
	コフキトンボ						殻																					
	リスアカネ															○	○		○	○	○		○	○				
	マユタテアカネ																	○										
	アキアカネ																					○	○	○	○		○	
	ショウジョウトンボ					○					○	○	○	○														
	チョウトンボ							○	○		○	○	○	○														
	コシアキトンボ							○	○		○	○	○	○			○	○										
	ウスバキトンボ										○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							

2022 年の出現種数はこれまでの最多となったものの、ベニイトトンボとナニワトンボの最後の確認年がそれぞれ 2014 年と 2016 年になっているのが気掛かりである。

2. バッタ目

バッタ目は 40 種が確認された（表 2）。大阪府レッドリスト種は準絶滅危惧のナツノツヅレサセコオロギの 1 種だけである。本種は、2014 年に初めて確認されて以降、増加傾向が続いている。

表2. 2022年4月から12月にかけて、せんごくの杜において確認されたバッタ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		5日	18日	23日	3日	16日	22日	2日	10日	20日	1日	11日	21日	1日	13日	20日	2日	13日	24日	2日	13日	21日	5日	11日	22日	2日	10日	25日
キリギリス科	クサギリ										△																	
	クビキリギリス																										○	
	ササギリ										△	△										○						
	オナガササギリ											△						○	○		○	○	○					
	ウスイロササギリ																	○	○		○	○						
	ホシササギリ									○								○	○		○	○			○			
	キリギリス			△			△			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
ヤブギリ	△	△	△	△	△	△	△	△	○		○				○													
ツユムシ科	セスジツユムシ																	△	○		○	○	○			○		
	サトクダマキモドキ													○	○					○	○		○					
コオロギ科	ナツノツヅレサセコオロギ									○	○	○	○															
	ツヅレサセコオロギ																	○	○	○	○	○		○		○	○	
	モリオカメコオロギ																○	○	○	○	○	○						
	ハラオカメコオロギ																○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	ミツカドコオロギ																			○								
	タンボコオロギ																			○								
	コガタコオロギ											○																
	エンマコオロギ										△	△	△			△	○	○	○	○	○	○	○					
	タイワンエンマコオロギ								○								○											
マツムシ科	アオマツムシ																	○	○	○	○	○	○	○				
	カンタン																○				○	○	○					
ヒバリモドキ科	クサヒバリ																	○	○	○	○	○	○	○	○			
	キンヒバリ							○	○	○	○							○	○	○	○	○	○	○				
	カヤヒバリ					○	○																					
	マダラスズ																○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カネタタキ科	シバスズ																			○	○	○	○	○	○			
	カネタタキ																○	○	○	○	○	○	○	○	○			○
アリヅカコオロギ科	サトアリヅカコオロギ											○																
オンブバッタ科	アカハネオンブバッタ											○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○			
	オンブバッタ																○	○										
ヒシバッタ科	ハラヒシバッタ																			○								
	ヒシバッタ属	△								△																		
バッタ科	ツチイナゴ	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	△	△	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○			
	コバネイナゴ									△		△	△				○	○	○	○		○	○	○	○			
	ショウリョウバッタ											△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	ショウリョウバッタモドキ																△	○			○							
	トノサマバッタ								○			○					○	○								○		
	クルマバッタモドキ																○	○										
	クルマバッタ																		○									
	マダラバッタ																	△										
イボバッタ											○			○	○	○	○	○	○	○	○							

タイワンエンマコオロギは、貝塚市内ではこれまで沿岸部だけで確認されていて、せんごくの杜調査で確認されたのは今回が初めてである。6月と8月に鳴き声を確認し、8月の調査では同種の研究をされている柳原浩良氏が合流し、数個体が採集された。クルマバッタも自身の調査では初めての確認であるが、自然遊学館が一般市民と協働で行ってきた「千石荘講座」では2015年に確認されている（貝塚市立自然遊学館、2017）。その他、注目種のショウリョウバッタモドキ（図 6）は、2015年以降、個体数も多く確認されている。



図 6. ショウリョウバッタモドキ幼虫
(2022 年 8 月 20 日)

普通種ながら 2019 年に確認ゼロ、2020 年に 1 個体のみの確認となっていたホシササキリは、2021 年に続き、2022 年もそれ以前のように容易に確認できる個体数に戻った。一時的に減少した原因は不明である。また普通種となってしまったアカハネオンブバッタと在来種のオンブバッタとの比較を記すと、2018 年（8 個体／1 個体）、2019 年（6 個体／2 個体）、2020 年（13 個体／2 個体）、2021 年（16 個体／0 個体）に続いて、2022 年は（30 個体／2 個体：ただし 3 倍の調査回数）となった。

2022 年の 40 種という種数は、月に 3 回の調査を行った 2005 年と 2006 年とほぼ同数であったが、ササキリモドキ、ノミバッタ、トゲヒシバッタ、ハネナガヒシバッタなどが、近年に確認が困難になった種としてあげられる。

3. ナナフシ目

5 月 3 日と 6 月 2 日に、それぞれ幼虫 1 個体、7 月 1 日に成虫 1 個体が確認された（図 7）。ナナフシモドキは月 1 回の調査年では確認されない年の方が多く、2018 年 4 月の 1 個体以来、4 年ぶりとなった。合計 3 個体の確認でも、月 1 回の調査に換算すれば、年 1 個体となるほど密度は低い。

前回の報告書で書き漏らしたことは、せんごくの杜における 2005 年以降の自身の定期的な調査ではナナフシ目としてナナフシモドキしか確認できていないが、調査とは別に動画撮影のためだけに訪れた 2018 年 6 月 12 日にトゲナナフシの幼虫を確認したことである。



図 7. ナナフシモドキ
(2022 年 7 月 1 日)

4. カマキリ目

オオカマキリ 29 個体（18 幼虫＋5♂6♀）、チョウセンカマキリ 1 個体（1♀）、ハラビロカマキリ 6 個体（5 幼虫＋1♂）、コカマキリ 3 個体（3♂）、およびサツマヒメカマキリ 1 個体（1 幼虫、図 8）の 5 種を確認した（表 3）。

優占種のオオカマキリに関して、前回の報告書で示したように、月 1 回の調査を行った 2018 年から 2021 年の 4 年間でそれぞれ、13、8、11、10 個体を確認してきた。今回の月 3 回の調査での 29 個体は、それらとほぼ同数と言える。



図 8. サツマヒメカマキリ若齢幼虫
(2022 年 10 月 2 日)

表 3. 2022 年 4 月から 12 月にかけて、せんごくの杜において確認されたカマキリ目
「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		5日	18日	23日	3日	16日	22日	2日	10日	20日	1日	11日	21日	1日	13日	20日	2日	13日	24日	2日	13日	21日	5日	11日	22日	2日	10日	25日
カマキリ科	オオカマキリ				△			△	△	△	△	△	△		△	○		○	○	○								
	チョウセンカマキリ																	○										
	ハラビロカマキリ										△	△	△		△			○										
	コカマキリ																	○		○	○							
ヒメカマキリ科	サツマヒメカマキリ														△													

ただし、月3回の調査を行った2005年と2006年はそれぞれ、178個体と164個体であったことから、2022年の29個体は大幅な減少と言える。17、8年前と比較して、環境の変化と言えば、周辺地域の開発のほか、二次林の成長による高茎草地と低茎草地の減少（圧迫）があげられる。チョウセンカマキリに関しては、当時から水田環境があるにも関わらず、少数個体しか確認されていなかった。その原因は、林縁と離れた水田があるのでオオカマキリとの種間関係とは考えにくく、優占地となり得る水田内に餌となる昆虫が極端に少ないことであると推測された。

カマキリの寄生者に関しては、6月2日にカマキリタマゴカツオブシムシを1個体確認しただけで、カマキリヤドリバエの卵の付着、およびオナガアシブトコバチは確認されなかった。

5. カメムシ目

セミ科では、クマゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシ、ニイニイゼミが毎年、鳴き声を聞く種で、2022年はそれらに加えて、ミンミンゼミの鳴き声を3年ぶりに聞いた（表4）。チッチゼミは2015年が最後の確認年となっている（表8参照）。

表4. 2022年4月から12月にかけて、せんごくの杜において確認された主なカメムシ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫、および「鳴」は成虫の鳴き声による確認であることを示す。

科	種	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		5日	18日	23日	3日	16日	22日	2日	10日	20日	1日	11日	21日	1日	13日	20日	2日	13日	24日	2日	13日	21日	5日	11日	22日	2日	10日	25日
セミ科	クマゼミ										鳴	鳴	鳴	鳴		鳴	鳴											
	アブラゼミ										鳴	鳴	鳴	鳴	鳴	鳴	鳴											
	ツクツクボウシ												鳴		鳴	鳴	鳴	鳴	○鳴									
	ミンミンゼミ														鳴	鳴	鳴	鳴										
	ニイニイゼミ									鳴	鳴	鳴	鳴	鳴	鳴	鳴	鳴	鳴	鳴									
ハゴロモ科	ベッコウハゴロモ											○	○			○		○										
	アミガサハゴロモ										○	○									○							
	チュウゴクアミガサハゴロモ									○	○						○	○	○	○	○	○		○		△	○	△
アブラムシ科	ヤノクチナガオアブラムシ					○	△							○										○	△	○	△	
	ビワコブオオアブラムシ																							○	○			
	キョウチクトウアブラムシ																○											
ヒラタカメムシ科	トビイロオヒラタカメムシ			○																								
カメムシ科	キマダラカメムシ															○												
	クサギカメムシ																											
	ミナミアオカメムシ																				○			○			○	
	チャバネアオカメムシ					○									○													
	ツヤアオカメムシ			○																								
マダナガカメムシ科	ヒメジュウジナガカメムシ					○															○	○						
ヘリカメムシ科	ホソハリカメムシ			○			○									○					○	○						
	ハリカメムシ					○	○					○																

自身の調査では2021年に初めて確認された外来種のチュウゴクアミガサハゴロモは、秋以降に多数の個体が確認され、アミガサハゴロモやベッコウハゴロモを抑えて、一気にハゴロモ科の優占種となってしまった。

アブラムシ科では、ガガイモ上でキョウチクトウアブラムシが目立つようになった（ヒメジュウジナガカメムシも）。また、同年11月12日に二色の市民の森において鞍井希風氏によって確認された外来種のビワコブオオアブラムシは、当地では11月18日に千石荘講座で、11月22日に本調査で確認された（図9）。その他、ハゼアブラムシ、マメアブラムシ、ギシギシアブラムシ、セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ、ソラマメヒゲナガアブラムシ、タイワンヒゲナガアブラムシ、ヤノクチ



図9. ビワコブオオアブラムシ
(2022年11月22日)

ナガオオアブラムシ、サクラコブアブラムシ（ゴール）が確認されている。

せんごくの杜で記録がなかった種としては、トビイロオオヒラタカメムシ、キマダラカメムシ、ハリカメムシがあげられる。キマダラカメムシは貝塚市内の他の場所では多くの記録があるので意外である。もしかしたら以前にせんごくの杜のボランティアの方から幼虫の画像を見せてもらったことがあったかもしれない。ハリカメムシは山地性の種とされ（安永ほか、2000）、2021 年まで当地で記録がなかったが、本調査では5 月から外周路で比較的多数の個体を確認した。

昨今、ニュースで取り上げられることがある「カメムシ大量発生」に関しては、表 4 に示したミナミアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシの幼虫（△印）と成虫（○印）の確認が、ほとんど1 個体のみである。

クスノキに付く外来種のクスベニヒラタカスミカメは2019 年以降確認されていない(表 8 参照)。前回の報告書で述べたように、せんごくの杜のクスノキが樹高 15m を越えるようなものがほとんどで（上久保、2020 参照）、目にする機会が少ないのかもしれない。

6. コウチュウ目

コハンミョウは7 月 11 日から8 月 20 日までの5 回の調査日で、林縁、外周路、水田の畦において確認された（表 5）。2013 年以来、久々の確認でありながら、各調査日の個体数は順に、約 10、約 10、30 以上、1、2 個体であり、大発生とは言えないまでも、なぜ突然にと不思議に思うレベルであった。

ヒゲナガハナノミは水辺の草地において成虫を見かけることが多い種だが、鞍井希風氏のご教示により4 月 18 日に水中の幼虫を確認することが出来た。



図 10. コハンミョウ
(2022 年 8 月 20 日)

表 5. 2022 年 4 月から 12 月にかけて、せんごくの杜において確認された主なコウチュウ目
「△」印は幼虫、「○」印は成虫、および「P」と「D」は、それぞれ蛹と死体による確認であることを示す。

科	種	4 月			5 月			6 月			7 月			8 月			9 月			10 月			11 月			12 月		
		5 日	18 日	23 日	3 日	16 日	22 日	2 日	10 日	20 日	1 日	11 日	21 日	1 日	13 日	20 日	2 日	13 日	24 日	2 日	13 日	21 日	5 日	11 日	22 日	2 日	10 日	25 日
ハンミョウ科	コハンミョウ											○	○	○	○	○												
クワガタムシ科	ヒラタクワガタ						○					○	○				○			○								
	コクワガタ																											
コガネムシ科	コフキコガネ						○						○															
	クリイロコガネ																											
	カブトムシ				△												○			△	△	△	△	△	△	△	△	△
ナガハナノミ科	ヒゲナガハナノミ	△○					○	○																				
カゾオブシムシ科	カマキリタマゴカゾオブシムシ							○																				
ナガシクイ科	セマダラナガシクイ													○														
オオキノコムシ科	ミヤマオビオオキノコ				○	○																						
	ルリオオキノコムシ		○																									
テントウムシ科	ムネアカオオクロテントウ			○																								
ホソカタムシ科	ルイスホソカタムシ				○	○	○	○																				
カミキリムシ科	ヤツボシハナカミキリ		○																									
	キマダラカミキリ				○																							
	ベニカミキリ			○																								
	エグリトラカミキリ					○																						
	ナガゴマフカミキリ								○	○																		
	キボシカミキリ											○		○														
	クワカミキリ												○															
	ハイロヤハズカミキリ			○																								
	ヒトビアラゲカミキリ					○																						
	フタクサハムシ							○			P					○	○											
ハムシ科	ヨツモンカメノコハムシ					○			○															○	○			
ヒゲナガゾウムシ科	シロヒゲナガゾウムシ		○																									
オサゾウムシ科	トホシオサゾウムシ										○																	
ナガキクイムシ科	カシノナガキクイムシ				D		D											○										

カシノナガキクイムシによる樹液の滲出と思われるものは以前から幾本かのクヌギやコナラなどの樹木から出ていたが、2020年9月の千石荘講座において澤田義弘氏によって成虫が採集され、当地のナラ枯れが確実にカシノナガキクイムシによるものであることが確かめられた。

自身の調査では、これまで脱出孔と樹液は確認していたものの、成虫の確認は本年が最初となった。それだけ個体数が増えたということだろう。それに加えて、カシノナガキクイムシの天敵と言われるルイスホソカタムシを5月の3回の調査日で確認した(図11)。



図 11. ルイスホソカタムシ
(2022年5月3日)

カミキリムシ科は確認された9種をすべて表5に掲載した。このうちヤツボシハナカミキリは珍しい種ではないものの、自然遊学館に標本がない種である。2019年5月2日に自身の調査において採集せずに撮影のみで済ませてしまい、今回もそのことを忘れて撮影のみで済ませてしまった。

外来種では、ムネアカオオクロテントウを4月23日に2個体確認し、これは2018年の初登場以来の当地での記録となった。ブタクサハムシは、外周路の整備に伴って繁茂したオオブタクサの葉を大いに食害している状態であった。また、貝塚市および当地において2020年に初めて確認されたヨツモンカメノコハムシは、餌植物であるリュウキュウアサガオ群落やヒルガオ群落以外の植物の葉上でも確認できるほど個体数が増えている。

7. ハエ目

ミスジガガンボは2018年以来の確認となった(図12)。表6には、キアシキンシギアブと、2018年から2021年の前回の報告で記録がなかったハナアブ科4種を掲載した。特に注目種にあげているハチモドキハナアブは、2013年まで毎年複数個体を確認されていたのに、2014年から忽然と見られなくなり、不思議に思っていた種である。今回、1個体だけではあるが、9年ぶりにクヌギの樹液上で確認された。虫えいとして確認されたタマバエ科は、ヨモギワタタマバエ、ヨモギクキコブタマバエ、ヨモギシロケフシタマバエ、クズトガリタマバエ、エノキトガリタマバエの5種であった。



図 12. ミスジガガンボ
(2022年6月20日)

表6. 2022年4月から12月にかけて、せんごくの杜において確認された主なハエ目

「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		5日	18日	23日	3日	16日	22日	2日	10日	20日	1日	11日	21日	1日	13日	20日	2日	13日	24日	2日	13日	21日	5日	11日	22日	2日	10日	25日
ガガンボ科	ミスジガガンボ									○																		
シギアブ科	キアシキンシギアブ				○																							
ハナアブ科	フタホシヒラタアブ	○	○		○																							
	オオフタホシヒラタアブ					○																						
	オオヒメヒラタアブ									○																		
	ハチモドキハナアブ																○											

8. チョウ目

チョウ類は、表7に示した33種を確認した。この中では、モンキアゲハの2016年以來が最も久々の確認である。それ以外はいずれも、前年に報告した4年間で確認された種で、イシガケチョウの2018年以來が4年ぶりの記録として続く(図13、14)。

月に3回調査を行った2005年は34種、2006年は36種という結果で、2006年の36種がこれまでの最多の種数である。月に1回の調査を行った2011年から2021年では、極端に少なかった2014年の19種を除いて、25~30種の確認であったので、月に3回を行うと種数が若干増えるのかもしれない。ただし、カマキリ目の場合と違って、個体数のデータをとっておらず、個体数の増減は不明である。

また、2014年の種数の少なさの原因も不明である。8月上旬に台風11号が近畿地方を直撃した(台風12号も沖縄から九州を北上)ことが直接の原因かは分からないが、ウラナミシジミが確認されなかったことはあっても、表7から分かるように、秋だけ確認される種はほとんどない。2014年はトンボ目の種数も最少を記録した年なので、他のグループなり、調査日ごとのデータなり、より詳しい解析が必要かもしれない。



図13. イシガケチョウ
(2022年5月22日)



図14. イシガケチョウ幼虫
(2022年6月10日)

表7. 2022年4月から12月にかけて、せんごくの杜において確認されたチョウ類
「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		5日	18日	23日	3日	16日	22日	2日	10日	20日	1日	11日	21日	1日	13日	20日	2日	13日	24日	2日	13日	21日	5日	11日	22日	2日	10日	25日
アゲハチョウ科	ナミアゲハ			○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○							
	キアゲハ											○							○		○							
	クロアゲハ		○	○	○		○					○																
	モンキアゲハ																											
	ナガサキアゲハ				○	○	○					○				○				○								
シロチョウ科	アオスジアゲハ			○	○		○					○	○	○	○	○		○		○								
	キタキチョウ	○	○	○			○	○	○	○		○		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○		○	○
	モンキチョウ			○	○	○	○	○	○	○			○			○				○	○	○	○	○	○			
	モンシロチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○		○	○				
タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ		○	○	○	○	○	○			○	○	○			○	○	○	○									
	ヒメジャノメ				○														○									
	ヒカゲチョウ								○	○	○	○	○						○		○							
	クロコノマチョウ	○	○		○	○	○		○	○						○				○	○	○		○				
	サトキマダラヒカゲ			○	○	○	○	○	○	○			○		○	○		○	○									
	コムスジ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○									
	アサマイチモンジ								○		○																	
	ルリタテハ		○	○														○										
	キタテハ	○	○	○		○	○	○	○	○		○											○	○	○	○	○	
	ヒメアカタテハ		○						○																			
	イシガケチョウ					○		△																				
シジミチョウ科	ゴマダラチョウ										○					○					△	○						△
	ツマグロヒョウモン				○			○	○	○	○	○	○			○		○		○	△	○		○				
	テングチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		○				○	○							
	ウラギンシジミ													○						○	○							
	ムラサキシジミ			○							○	○	○	○	○					○	○			○				
	ヤマトシジミ			○	○		○		○	○	○	○	○	○	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ウラナミシジミ							○	○	○	○	○	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
セセリチョウ科	ツバメシジミ		○					○	○	○	○	○	○			○												
	ルリシジミ	○		○					○																			
	ベニシジミ	○	○	○	○				○	○	○	○																
	イチモンジセセリ															○	○	○	○	○	○					○		
セセリチョウ科	チャバネセセリ										○					○	○		○	○	○			○				
	コチャバネセセリ										○				○	○				○	○							

注目種のツマキチョウは、調査期間外の3月25日に確認されたので、4月から調査開始というのは再考の余地がある。

ガ類の注目種であるコシロシタバを9月2日に、キノコヒモミノガの幼虫（蓑）は4月から12月のほぼすべての調査日で確認した。ムナブトヒメスカシバは自然遊学館に標本がない種であるが、2020年7月2日に撮影のみで済ませてしまい、そのことを忘れて今回も9月13日に撮影のみで済ませてしまった（速報参照）。

以下、付図の速報に掲載しなかったガ類の画像の幾つかを示した（図15～17）。その他、カシワマイマイの幼虫を6月2日にクヌギの樹幹で確認したが、あまりに背景に溶け込んでいて何か分からないので、その画像は省略した。



図 15. ヒメクロバ
(2022年6月10日)



図 16. オオトビスジェダシャク幼虫
(2022年5月16日)



図 17. フタナミトビヒメシャク幼虫
(2022年7月1日)

やや気になる種はナシケンモンで、2021年まで当地で確認されなかったにも関わらず、速報に掲載した11月11日（アカメガシワ上）以外にも、5月3日と5月16日にもクズ上で確認された。いずれも幼虫での確認である（自然遊学館には1995年の貝塚市木積産成虫の標本が1個体所蔵されている）。自身が個人的に調査している和泉市の信太山でも2002年の調査開始以来、2021年に初めて幼虫を確認したこととの類似が、気になる度合いを増加させる。

ガ類の記録に関しては、日中の調査であることから、個体数がかなり多い種、昼行性の種、および幼虫での確認に限られ、せんごくの杜のガ類相の解明には程遠いものであるのは明らかで、それは月に3回と調査回数を増やしても変わらないことである。

9. ハチ目

注目種としては、ニホンミツバチが11月5日に確認された（表8参照）。オオツマグロハバチ（図18）は、自然遊学館に2014年の蕎原産標本が1個体所蔵されている。8月1日に確認されたムツバセイボウは自然遊学館に標本がない種で、これは採集して標本とした。

スズメバチ科では、オオスズメバチが10回の調査日、コガタスズメバチが6回の調査日、ヒメスズメバチが7月11日に



図 18. オオツマグロハバチ
(2022年5月16日)

確認された。18種が確認されたアリ類では、クロナガアリ（5月3日）、ヒメオオズアリ（5月3日）、オオズアリ（6月3日、6月20日）が、見取り法中心の調査ではやや見つける頻度が低い種かもしれない。

外来種としては、9月13日にタイワンタケクマバチ、12月10日にツマアカベッコウ（図19）が確認された。いずれも自身の調査では2005年以降、初めて視認したものである。ただし、タイワンタケクマバチは2021年の千石荘講座において当地で初めて確認されている（2021年8月23日に澤田智子氏によって三ヶ山で採集されたものが自然遊学館の初標本である）。



図19. ツマアカベッコウ
(2022年12月10日)

10. その他の目

ゴキブリ目では、11回の調査日で確認されたモリチャバネゴキブリのほか、ヒメクロゴキブリが4調査日で、クロゴキブリの幼虫が8月13日に確認された。ほとんどの調査年においてモリチャバネゴキブリのみの確認であったが、ボランティアの方々によって樹木に名札が掛けられ、それをめくった際にヒメクロゴキブリを確認する機会が多くなっている。

ハサミムシ目は、例年通り、ヒゲジロハサミムシだけが9回の調査日で確認され、そのうち6月10日のメス成虫は卵塊を保護していた（図20）。

チャタテムシ目では、5月3日に *Valenzuela scriptus* を確認された。これは以前からよく見かけていたものだが、和名を知らない。

アミメカゲロウ目も、チャタテムシ目と同じく、スウィーピングを行わない調査では極端に種数が少なくなってしまうが、イツホシアカマダラクサカゲロウが8月13日と9月13日に、ホソバヒメカゲロウが4月18日に、カスリヒロバカゲロウが7月1日に確認された。



図20. ヒゲジロハサミムシ
(2022年6月10日)

最後に、カゲロウ目では、ナミコガタシマトビケラが5月3日に確認された。その幼虫は、おそらく二次林と耕作地の間を流れる水路に生息しているものと推測される。

11. 大阪府レッドリスト種と注目種

2005年と2006年、および2011年から2022年までの調査で確認された大阪府レッドリスト種、および注目種を表8にまとめた。注目種は、里山的環境の指標となる種、防除上重要と思われる種、外来種（国内外来種を含む）、2014年の大阪府レッドリストの改定によりランク外とされた種、および経年の調査により確認年のパターンが極端な変化を示した種などを含む。

表8では、2005年、2006年、および2022年は月に3回の調査であるのに対して、2011年から2021年までは月に1回の調査であることにも注意が必要である。

表8. せんごくの杜において2005年、2006年、および2011年～2022年に行われた調査で確認された大阪府レッドリスト種および注目種

項目	目	科	種	2005年	2006年	2001年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
絶滅危惧Ⅱ類	トンボ目	トンボ科	ナニワトンボ		○				○									
準絶滅危惧	トンボ目	イトトンボ科	ベニイトトンボ	○	○				○	○	○	○						
			キイトトンボ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		サナエトンボ科	ウチワヤンマ									○	○	○	○	○	○	○
		ヤンマ科	サラサヤンマ													○	○	○
		トンボ科	コフキトンボ															○
			アキアカネ	○	○	○		○					○	○	○	○	○	○
			ナツアカネ	○														
			ノシメトンボ	○	○	○	○											
			ヨツボシトンボ								○		○					
	バッタ目	コオロギ科	ナツノツツレサセコオロギ							○	○	○	○	○	○	○	○	○
	コウチュウ目	テントウムシ科	ジュウサンホシテントウ										○					
	チョウ目	セセリチョウ科	ホソバセセリ							○								
		コブガ科	ウスアオリンガ								○	○						
注目種	トンボ目	サナエトンボ科	タイワンウチワヤンマ	○										○	○		○	
		トンボ科	マユタテアカネ														○	○
	バッタ目	コオロギ科	タイワンエンマコオロギ															○
		マツムシ科	マツムシ	○	○	○	○			○				○	○			
			カンタン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○
		ヒバリモドキ科	ウスグモスズ			○							○	○	○			
		オンブバッタ科	アカハネオンブバッタ										○	○	○	○	○	○
		バッタ科	ショウリョウバッタモドキ	○							○	○	○	○	○	○	○	○
			クルマバッタ															○
	カマキリ目	ヒメカマキリ科	サツマヒメカマキリ		○		○	○		○						○		○
			ヒメカマキリ						○									
	ナナフシ目	ナナフシ科	ナナフシモドキ	○		○		○					○	○				○
	カメムシ目	セミ科	ミンミンゼミ	○		○									○			○
			チッチゼミ	○	○		○	○	○	○								
		ハゴロモ科	チュウゴクアミガサハゴロモ														○	○
		カスミカメムシ科	クスベニヒラタカスミカメ							○	○	○		○				
		キンカメムシ科	オオキンカメムシ	○														
		ヘリカメムシ科	ハリカメムシ															○
	アミメカゲロウ目	クサカゲロウ科	アミメクサカゲロウ	○	○		○	○	○				○	○				
		ラクダムシ科	ラクダムシ			○												
	コウチュウ目	ハンミョウ科	コハンミョウ			○		○										○
		クワガタムシ科	ヒラタクワガタ	○	○												○	○
		コガネムシ科	カブトムシ	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		テントウムシ科	ムネアカオオクロテントウ										○					○
		ホソカタムシ科	ルイスホソカタムシ															○
		ハムシ科	ヨツモンカメノコハムシ													○	○	○
		ナガキクイムシ科	カシノナガキクイムシ															○
	ハエ目	シギアブ科	キアシキンシギアブ	○		○	○			○						○	○	○
		ハナアブ科	ハチモドキハナアブ	○	○	○	○	○										○
	チョウ目	シロチョウ科	ツマキチョウ	○	○	○									○			
		シジミチョウ科	ミズイロオナガシジミ		○			○										
		ヤガ科	コシロシタバ				○	○							○			○
	ハチ目	コシブトハナバチ科	ニッポンヒゲナガハナバチ		○						○							
			シロスジヒゲナガハナバチ			○									○	○	○	
		ミツバチ科	ニホンミツバチ		○	○				○						○	○	○

ただし、せんごくの杜において確認された大阪府レッドリスト種の昆虫は、表8に記したものでなく、2016年の千石荘講座において確認された絶滅危惧Ⅱ類のオグマサナエ（澤田、2016）、2018年に確認された絶滅危惧Ⅱ類のアカマダラハナムグリ（山口、2018）、2018年に秋武仁志氏によって確認された準絶滅危惧のカトリヤンマ、2018年の千石荘講座で確認されたハルゼミ（貝塚市立自然遊学館、2020）、および2016年の千石荘講座で確認されたキシタアツバ（貝塚市立自然遊学館、2018）などがあげられる（以上は、著者の知る限りのものである）。

最後に、本文中や表中において和名のみで紹介した種に関して、表9として学名を付した。

表9. 本文および表中に記された種の和名と学名

トンボ目 (表1より)	
和名	学名
ハグロトンボ	<i>Atracopteryx atrata</i>
アオイトトンボ	<i>Lestes sponsa</i>
オオアオイトトンボ	<i>Lestes temporalis</i>
キイトトンボ	<i>Ceragrion melanurum</i>
アオモンイトトンボ	<i>Ischnura senegalensis</i>
ウチワヤンマ	<i>Sinictinogomphus clavatus clavatus</i>
ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>
クロスジギンヤンマ	<i>Anax nigrofasciatus nigrofasciatus</i>
サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna priyeri</i>
シオカイトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>
シオヤトンボ	<i>Orthetrum japonicum</i>
オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum melania melania</i>
コフキトンボ	<i>Deilelia phaon</i>
リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i>
マユタチアカネ	<i>Sympetrum eroticum eroticum</i>
アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>
ショウジョウトンボ	<i>Crocothemis servilla mariannae</i>
チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>
コシアカトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>
ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>

バッタ目 (表2より)	
和名	学名
クササキ	<i>Ruspolia lineosa</i>
クビサキギス	<i>Euconocephalus thunbergi</i>
サササキ	<i>Conocephalus melaenus</i>
オナガサササキ	<i>Conocephalus gladiatus</i>
ウスイロサササキ	<i>Conocephalus chinensis</i>
ホシサササキ	<i>Conocephalus maculatus</i>
キリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>
ヤブサキ	<i>Tettigonia orientalis</i>
セスジツユムシ	<i>Ducetia japonica</i>
サトクダマキモドキ	<i>Holochlora japonica</i>
ナツノツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus grylloides</i>
ツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus micado</i>
モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>
ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>
ミツカドコオロギ	<i>Loxoblemmus doerntzi</i>
タンボコオロギ	<i>Modicogryllus siamensis</i>
コガタコオロギ	<i>Velarifictorus ornatus</i>
エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>
タイワンエンマコオロギ	<i>Teleogryllus occipitalis</i>
アオマツムシ	<i>Trujalia hibonisi</i>
カンタン	<i>Oecanthus longicauda</i>
クサヒバリ	<i>Sivistella bifasciata</i>
キンヒバリ	<i>Natula matsurai</i>
カヤヒバリ	<i>Natula pallidula</i>
マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofasciatus</i>
シバスズ	<i>Polionemobius mikado</i>
カネタタキ	<i>Ornebius kanetaki</i>
サトアリツカコオロギ	<i>Myrmecophilus teramori</i>
アカハネオンプバッタ	<i>Atractomorpha sinensis sinensis</i>
オンプバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>
ハラヒンバッタ	<i>Tetrix japonica</i>
ヒシンバッタ属	<i>Tetrix</i> sp.
ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>
コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>
ショウリヨウバッタ	<i>Acrida cinerea</i>
ショウリヨウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i>
トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>
クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>
クルマバッタ	<i>Gastrimargus marmoratus</i>
マダラバッタ	<i>Aiolopus thalassinus tamulus</i>
イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>

カマキリ目 (表3より)	
和名	学名
オオカマキリ	<i>Tenodera aridifolia</i>
チョウセンカマキリ	<i>Tenodera angustipennis</i>
ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>
コカマキリ	<i>Statilia maculata</i>
サツマヒメカマキリ	<i>Acromantis australis</i>

カメムシ目 (表4より)	
和名	学名
クマゼミ	<i>Cryptotympana facialis</i>
アブラゼミ	<i>Graptopsaltia nigrofuscata</i>
ツクツクボウシ	<i>Meimuna opalifera</i>
ミンミンゼミ	<i>Hyalessa maculaticollis</i>
ニイニイゼミ	<i>Platypleura kaempferi</i>
ベッコウハゴロモ	<i>Orosanga japonica</i>
アミガサハゴロモ	<i>Pochazia albomaculata</i>
チュウゴクアミガサハゴロモ	<i>Ricania shantungensis</i>
ヤノクチナガオアブラムシ	<i>Stomaphis yanonis</i>
ビワコブオアブラムシ	<i>Tuberolachnus macrotuberculatus</i>
キョウチクトウアブラムシ	<i>Aphis neri</i>
トビイロオヒラタカメムシ	<i>Neuroctenus castaneus</i>
キマダラカメムシ	<i>Ertesia fullo</i>
クサギカメムシ	<i>Halysomorpha halys</i>
ミナミアオカメムシ	<i>Nezara viridula</i>
チャバネアオカメムシ	<i>Plautia crossota stali</i>
ツギアオカメムシ	<i>Glaucias subnunctatus</i>
ヒメジウジンガカメムシ	<i>Tropidothorax sinensis</i>
ホソハリカメムシ	<i>Cletus punctiger</i>
ハリカメムシ	<i>Cletus rusticus</i>

コウチュウ目 (表5より)	
和名	学名
コハンミョウ	<i>Myriochile specularis</i>
ヒラタクワガタ	<i>Dorcus titanus</i>
コクワガタ	<i>Dorcus rectus</i>
コフコガネ	<i>Melolontha japonica</i>
クリイロコガネ	<i>Milodoba castanea</i>
カブトムシ	<i>Trypoxylus dichotomus</i>
ヒゲナガハナノミ	<i>Paralichas pectinatus</i>
カマキリタマゴカマツオブシムシ	<i>Thaumaglossa rufocapillata</i>
セマダラナガシシクイ	<i>Lichenophanes carinipennis</i>
ミヤマオビオオキノコ	<i>Episcapha gorhami</i>
ルリオオキノコムシ	<i>Aulacochilus sibiricus</i>
ムネアカオウロテントウ	<i>Symona consanguinea</i>
ルイスホソカタムシ	<i>Gemmyodes lewisii</i>
ヤツボシハナカミキリ	<i>Leptura mimica</i>
キマダラカミキリ	<i>Aeolesthes chrysothrix chrysothrix</i>
ベニカミキリ	<i>Purpuricenrus temminckii</i>
エグリトラカミキリ	<i>Chlorophorus japonicus</i>
ナガゴマフカミキリ	<i>Mesosa longipennis</i>
キボシカミキリ	<i>Psacothoe hilaris hilaris</i>
クワカミキリ	<i>Apriona japonica</i>
ハイイロヤハズカミキリ	<i>Niphona furcata</i>
ヒトビアカゲカミキリ	<i>Rhopaloscelis unificatiatus</i>
フタクサハムシ	<i>Ophraella communa</i>
ヨツモンカメノコハムシ	<i>Lacocoptera quadrimaculata</i>
シロヒゲナガゾウムシ	<i>Platystomos sellatus</i>
トホシオサゾウムシ	<i>Apoltes roelofsi</i>
ガシノナガキウイムシ	<i>Platypus quercivorus</i>

ハエ目 (表6より)	
和名	学名
ミスジガガンボ	<i>Gymnastes flavitibia</i>
キアシキンシギアブ	<i>Chrysopilus ditissimis</i>
フタバホシヒラタアブ	<i>Euspedes corollae</i>
オオフタバホシヒラタアブ	<i>Syrphus ribesii</i>
オオヒメヒラタアブ	<i>Allograpta lavana</i>
ハチモドキハナアブ	<i>Monoceromyia pleuralis</i>

チョウ目 (表7より)	
和名	学名
ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>
キアゲハ	<i>Papilio machaon</i>
クロアゲハ	<i>Papilio protenor</i>
モンキアゲハ	<i>Papilio helenus</i>
ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon thunbergii</i>
アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon nipponum</i>
キチョウ (キタキチョウ)	<i>Eurema mandarina</i>
モンキチョウ	<i>Colias erate poligraphus</i>
モンシロチョウ	<i>Pieris rapae crucivora</i>
ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>
ヒメジャノメ	<i>Mycalesis gotama</i>
ヒガキチョウ	<i>Lethae sicelis</i>
クロノマチョウ	<i>Melanitis phedima oitensis</i>
サトキマダラヒカゲ	<i>Neope gosschkevitschii</i>
コムシジ	<i>Neptis sappho intermedia</i>
アサマイチモンジ	<i>Limenitis glorifica</i>
ルリタテハ	<i>Kanisa caerule</i>
キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>
ヒメアカタテハ	<i>Vanessa cardui</i>
イシガケチョウ	<i>Orestia thyodamas</i>
ゴマダラチョウ	<i>Hestina persimilis japonica</i>
ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius hyperbius</i>
テングチョウ	<i>Libythea celtis celtoides</i>
ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i>
ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i>
ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha argia</i>
ウラナミシジミ	<i>Lampides boeticus</i>
ツバメシジミ	<i>Eueres argades hellotis</i>
ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus iadonides</i>
ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas daimio</i>
イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata guttata</i>
チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias</i>
コチャバネセセリ	<i>Thoresia varia</i>

注目種 (表8のみ)	
和名	学名
ナニワトンボ	<i>Sympetrum gracile</i>
ベニイトトンボ	<i>Ceragrion nipponicum</i>
サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna priyeri</i>
ナツアアカネ	<i>Sympetrum darwinianum</i>
ノシメトンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i>
ヨツボシントンボ	<i>Libellula quadrimaculata asahinai</i>
ジュウサンボシテントウ	<i>Hippodamia tredecimpunctata timberlakei</i>
ホソバセセリ	<i>Isotrinon lamprospilus lamprospilus</i>
ウスアオリンガ	<i>Paracrama angulata</i>
タイワンウチワヤンマ	<i>Itinogomphus pertinax</i>
マツムシ	<i>Xenogryllus marmoratus</i>
ウスグモスズ	<i>Amusurgus genji</i>
ヒメカマキリ	<i>Acromantis japonica</i>
テッチゼミ	<i>Kosemia radiator</i>
クスベニヒラタカスミカメ	<i>Mansoniella cinnamomi</i>
オオキンカメムシ	<i>Eucorysses grandis</i>
アミメクササカゲロウ	<i>Necurus matsumurae</i>
ラクダムシ	<i>Inocellia japonica</i>
ミズイロオナガシジミ	<i>Artigius attila</i>
ゴシロシタバ	<i>Catocala actaea</i>
ニッポンヒゲナガハナバチ	<i>Tetralonia nipponensis</i>
シロスジヒゲナガハナバチ	<i>Eucera spurcatipes</i>
ニホンミツバチ	<i>Apis cerana</i>

その他の昆虫 (本文中のみ、上記以外)	
和名	学名
カトリヤンマ	<i>Gynacantha japonica</i>
オグマサナエ	<i>Trigomphus ogumai</i>
モリチャバネゴキブリ	<i>Blattella nipponica</i>
ヒメクロゴキブリ	<i>Sorineuchora nigra</i>
ヒゲジロハサミムシ	<i>Gonolabis marginalis</i>
ハゼアブラムシ	<i>Toxoptera odinae</i>
マメアブラムシ	<i>Aphis craccivora</i>
ギンギシアブラムシ	<i>Aphis rumicis</i>
セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ	<i>Uroleucon nigrotuberculatum</i>
タイワンヒゲナガアブラムシ	<i>Uroleucon formosanum</i>
ソラマヒゲナガアブラムシ	<i>Megoura crassicauda</i>
サクラコブアブラムシ	<i>Tuberocephalus sakurai</i>
イツホシアマダラクササカゲロウ	<i>Pseudomallada cognatellus</i>
ホソバヒメカゲロウ	<i>Micromus linearis</i>
カスリヒロバサゲロウ	<i>Spilosmylus nipponensis</i>
アカマダラハナムグリ	<i>Poecilophilides rusticola</i>
ヨモギワタマバエ	<i>Rhopalomyia giraldi</i>
ヨモギクキコブタマバエ	<i>Rhopalomyia struma</i>
ヨモギシロケフシタマバエ	<i>Rhopalomyia cinerarius</i>
クストガリタマバエ	<i>Ptydiplosis pueariae</i>
エノキトガリタマバエ	<i>Celticecis japonica</i>
カマキリヤドリバエ	<i>Exorista bisetosa</i>
ツマキチョウ	<i>Anthocharis scolymus</i>
ムナフトヒメスカシバ	<i>Trichoceroa constricta</i>
ヒメクロバ	<i>Artona funeralis</i>
オオトビスジエダシヤク	<i>Ectropis excellens</i>
フタナミトビヒメシヤク	<i>Pylargosceles steganioides</i>
カシワマイマイ	<i>Lymantria mathura aurora</i>
ナシケンモン	<i>Viminia rumicis</i>
キシタアツバ	<i>Hypona claripennis</i>
ナミコガタシマトビケラ	<i>Cheumatopsyche infascia</i>
オナガアシトコバチ	<i>Podagrion nipponicum</i>
オオツマクロハバチ	<i>Tenthredo providens</i>
オオスズメバチ	<i>Vespa mandarina</i>
コガタスズメバチ	<i>Vespa analis</i>
ヒメスズメバチ	<i>Vespa ducalis</i>
クロナガアリ	<i>Messor aciculatus</i>
ヒメオオズアリ	<i>Pheidole piei</i>
オオズアリ	<i>Pheidole noda</i>
タイワンタケumaバチ	<i>Xylocopa tranquebarorum</i>
ツマアカベッコウ	<i>Tachypompilus analis</i>

植物および菌類 (本文中、登場順)

和名	学名
カエンタケ	<i>Trichoderma cornu-damae</i>
オオブタクサ	<i>Ambrosia trifida</i>
ガガイモ	<i>Metaplexis japonica</i>
クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i>
リュウキュウアサガオ	<i>Ipomoea indica</i>
ヒルガオ	<i>Calystegia pubescens</i>
アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i>

謝辞

せんごくの杜の動植物に関してご教示いただいた秋武仁志、奥田大介、北田誠、鞍井希風、佐々木仁、柳原浩良、山口隼平、吉田元三郎の各氏、および貝塚市立自然遊学館のスタッフ、せんごくの杜ボランティアの方々に謝意を表する。

引用文献・参考文献

- 石井 実・青柳正人・岩崎 拓・中谷至伸・上田達也（1997） 貝塚市千石堀城址周辺の昆虫。「貝塚市自然環境調査報告書（1996年度）」、pp. 31-46、貝塚市立自然遊学館。
- 稲津和之・西田昭夫（2011） トビケラ目、『兵庫の川の生き物図鑑』（兵庫陸水生物研究会）：169-212。
- 岩崎 拓（2006） 千石荘の昆虫Ⅰ．貝塚の自然 第9号：1-11。
- 岩崎 拓（2008） 千石荘の昆虫Ⅱ（2006年度調査）．貝塚の自然 第10号：24-35。
- 岩崎 拓（2013） 千石荘の昆虫（2011年度調査）．貝塚の自然 第15号：5-14。
- 岩崎 拓（2016） 千石荘の昆虫（2012-2013年度調査）．貝塚の自然 第17号：74-87。
- 岩崎 拓（2018） 千石荘の昆虫（2014-2015年度調査）．貝塚の自然 第19号：66-80。
- 岩崎 拓（2020） 千石荘の昆虫（2016-2017年度調査）．貝塚の自然 第21号：39-54。
- 岩崎 拓（2024） 千石荘の昆虫（2018-2021年度調査）．貝塚の自然 第23号：12-38。
- 上久保文貴・湯浅幸子・岩崎 拓（2016） 千石荘植物調査（2012-2013年度）．貝塚の自然 第17号：44-73。
- 上久保文貴・湯浅幸子・白木江都子・鈴子勝也・岩崎 拓（2020） 千石荘樹木調査（2012-2018年）．貝塚の自然 第20号：1-22。
- 河添純子（2020） ヨツモンカメノコハムシ．自然遊学館だより No.96：3-4。
- 大阪府（2014） 「大阪府レッドリスト2014」．48pp.、大阪府環境農林水産部みどり・都市環境室。
- 環境庁（1997） 都道府県別メッシュマップ 27 大阪府．36pp.、環境庁自然保護局計画課自然環境調査室。
- 貝塚市立自然遊学館（2015） 千石荘周辺の動植物とその保全について．貝塚市立自然遊学館報 No.1（2013年度）：7-12。
- 貝塚市立自然遊学館（2017） 千石荘昆虫調査（講座）2015．貝塚市立自然遊学館報 No.3（2015年度）：4-8。
- 貝塚市立自然遊学館（2018） 千石荘昆虫調査（講座）2016．貝塚市立自然遊学館報 No.4（2016年度）：4-11。
- 貝塚市立自然遊学館（2019） 千石荘昆虫調査（講座）2017．貝塚市立自然遊学館報 No.5（2017年度）：4-11。
- 貝塚市立自然遊学館（2020） 千石荘昆虫調査（講座）2018．貝塚市立自然遊学館報 No.6（2018年度）：4-10。
- 貝塚市立自然遊学館（2021） 千石荘昆虫調査（講座）2019．貝塚市立自然遊学館報 No.7（2019年度）：4-11。
- 気象庁・気象統計 <https://www.jma.go.jp/jma/menu/menureport.html> （2024年1月）
- 神戸のトンボ <https://www.odonata.jp/index.html> （2024年1月）
- 昆虫エクスペローラー <https://www.insects.jp/> （2024年1月）
- 澤田智子（2016） はじめまして「オグマサナエ」です！．自然遊学館だより No.80：8-9。
- 澤田智子（2021） せんごくの杜昆虫調査／楽しい昆虫調査イベントへの試行錯誤．自然遊学館だより No.98：4-6。
- 白木江都子・岩崎 拓（2017） クスベニヒラタカスミカメ．自然遊学館だより No.82：1-2。
- 初宿成彦（2021） 大阪市立自然史博物館・外来生物調査プロジェクト（Project A）によるムネアカオクロテントウ・ユーカリハムシ・ヨツモンカメノコハムシの市民調査報告．Bulletin of the Osaka Museum of Natural History,

No. 75 : 53-77.

鈴木知之・横田光邦・筒井 学 (2020) 『イモムシとケムシ チョウ・ガの幼虫図鑑 (小学館の図鑑・NEO、第 3 刷)』、
広渡俊哉・矢後勝也監修、小学館、159pp.

竹内正人 (2009) 『写真集 ハナアブ 300』、双翅目談話会、300pp. (+日本のハナアブ科暫定リスト 8pp. +和名索引 4pp.)

みんなで作る日本産蛾類図鑑 V2 <http://www.jpmoth.org/> (2024 年 1 月)

村井貴史・伊藤ふくお (2011) 『バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑』、日本直翅類学会監修、北海道大学出版会、
449pp.

安永智秀・穆 怡然・長島聖大・山田量崇・高井幹夫 (2016) 最近日本に侵入した外来カスミカメムシ : *Mansoniella*
cinnamomi. *Rostria*, No. 60 : 17-20.

安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫 (2000) 『日本原色カメムシ図鑑』、友国雅章監修、全国農村教育協
会、380pp.

山口隼平 (2018) アカマダラハナムグリ ～ 台風が呼んだ希少種との出会い ～. 自然遊学館だより No. 89 : 1-2.

湯川淳一・榊田 長編著 (2002) 『日本原色虫えい図鑑』(初版第 3 刷)、全国農村教育協会、826pp.

吉田浩史・岩崎 拓 (2012) 大阪府貝塚市のハバチ亜目. 貝塚の自然 第 14 号 : 37-46.

付図

毎回の調査後すぐに、昆虫のほか、他の動植物や景観も含めて、調査速報を作成したので、それ
らを付図として掲載した。

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年4月①）

2022年4月5日 天候：晴れ 調査者1名

昆虫はまだ少なめですが、花はいろいろ咲いています。スミシ類では、ノジスミシ（右の写真）、コスミシ、タチツボスミシが昨年より多く咲いていました。その他、小葉が4枚で、花序が長いタイプのごようアケビを見ました。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、モンシロチョウ、キタキチョウ、クロコノマチョウ、キタテハ、テングチョウ、ベニシジミ、ルリシジミの7種を確認しました。一番多かったのは、モンシロチョウで、次いでキタキチョウ、残りの5種は1個体のみの確認でした。



テングチョウ

ハエ目

一番種数が多かったのがハエ目です。種名が分かったものは、アシブトハナアブ、フタホシヒラタアブ、ヒロウドツリアブ、ヒゲナガヤチバエ、マルボシヒラタドリハエで、コスリカ科の3種とキンバエ属は、調べるのが難しいです。



フタホシヒラタアブ

その他の昆虫

コウチュウ目では、ヒラタハナムグリ、ナナホシテントウ（幼虫と蛹）、ナミクチキムシ、バッタ目では、ヤブキリの幼虫、ツチイナゴ、ヒシバッタ属の幼虫、ハチ目では、ウメマツオオアリとトビイロケアリ、カメムシ目では、ベニキジラミのゴール（虫食い）を確認しました。



ヒラタハナムグリ

シダ植物

林内の優占種は、コシダ、ベニシダ、ウラジロで、フモトシダとホラシノブが少しというは変わりません。ただ、10年ほど前の調査ではなかったノコギリシダとハシゴシダが結構生えていました。その他、毛色は違いますが、ノキシノブと多くのスグナを確認しました。



ノコギリシダ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年4月②）

2022年4月18日 天候：晴れ 調査者1名

前回よりも気温が上がり、昆虫の出現種も、開花植物の種数も増えました。外周路が整備されつつあり、その脇にナルトサワギクが増えています。ナナホシテントウがノアザミの蕾にいたアブラムシを摂食していました。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類は、クロアゲハ、モンシロチョウ、キタキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、クロコノマチョウ、ルリタテハ、キタテハ、ヒメアカタテハ、テングチョウ、ツバメシジミ、ベニシジミを確認しました。ガ類は、右の写真のトガリエダシャクだけを確認しました。



トガリエダシャク

コウチュウ目

右の写真は、シロヒゲナガソウムシです。樹幹に溶け込むような体色をしていて、オスの触角が体長より長いのが特徴です。その他、ナナホシテントウ、ヒゲナガハナノミ、クロヒメクビソジョウカイ、ルリオオキノコムシ、ヤブボシハナカミキリなどを確認しました。



シロヒゲナガソウムシ

カメムシ目

クヌギの樹洞に、ヨコツナサシガメの幼虫、成虫、羽化殻が、計30ほど密集していました。ムネアカアワフキはヤマザクラに、ベニキジラミはアケビに、マルカメムシはクズにと、組み合わせが決まっているものもあれば、ツマクロオヨコバイのように決まっていなかった種もいます。



ヨコツナサシガメ

その他

倒木の下に、ハグロケバエが5個体いて、そのそばにいたウジ虫も羽化待ちの個体だと思えます。フタホシヒラタアブを、前回に引き続き確認しました。バッタ目はヤブキリの幼虫とツチイナゴ、ハサミムシ目はヒゲジロハサミムシ、その他、アリ類6種などを確認しました。



ハグロケバエ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年4月③）

2022年4月23日 天候：晴れ 調査者1名

林縁ではモチツツジの花が咲き、林内の所々では、クロバイの花が咲いていました。クロバイの白い花はこの時期の晴れの日には、輝いて見えます。ケヤキ広場では、ボランティアの方々が林の手入れをされていました。



チョウ目 チョウ類16種

チョウ類は、ナミアゲハ、クロアゲハ、アオスジアゲハ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ルリタテハ、キタテハ、ムラサキシジミなど、16種を確認しました。ガ類では、ソメイヨシノの衰弱木に生えたシハイタゲで、キノコヒモミノガの幼虫の新しい生息場所を確認しました。



キノコヒモミノガ幼虫

カメムシ目

コナラの新葉にはコブヒゲカスミカメとケブカキベリナガカスミカメ、カラスノエンドウにはマメアブラムシとソラマメヒゲナガアブラムシがいて、この時期の馴染みの光景です。右の写真は、クスノキの樹幹にいたトビイロオオヒラタカメムシで、越冬明け直後の個体でしょう。



トビイロオオヒラタカメムシ

コウチュウ目

ムネアカオオクロテントウがオオシマザクラの葉に2個体、止まっていた。ベニカミキリとハイロヤハズカミキリは、ボランティアの方の採集です。その他、サビキコリ、クシコメツキ、ヨツモンクロツツハムシ、ツツジトゲムネサルソウムシなどの常連の種を確認しました。



ムネアカオオクロテントウ

その他

トンボ目はシオヤトンボ、バッタ目は、ヤブキリの幼虫、キリギリスの幼虫、ツチイナゴの3種、ハサミムシ目は、ヒゲジロハサミムシ、コキブリ目も、モリチャバネゴキブリの幼虫だけでした。ハエ目とハチ目は、種数はそれなりですが、常連の種ばかりでした。



セスジュスリカ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年5月①）

2022年5月3日 天候：晴れ 調査者1名

快適な気候です。林縁のモチツツジの花には、アゲハチョウの仲間が多く吸蜜に来ていました。前回の調査時に咲いていたクロバイの花はすでになく、代わりにと言うのも変ですが、オオアブラギリの花が咲いていました。



チョウ目 チョウ類14種

チョウ類は、ナミアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ、アオスジアゲハ、クロコノマチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ツマクロヒョウモンなど、14種を確認しました。ガ類では、ホソオビヒゲナガ、クロスジキノメイガ、アケビキノハの幼虫などを確認しました。



アケビキノハ幼虫

コウチュウ目

牛神池のほとりのクヌギで、樹幹に近いクモの巣に、カシノナガキクイムシが1個体、かかっていた。せんごくの杜で初めて成虫が得られたのは昨年ですが、それ以前から変な樹液は出ていました。このカシナガの天敵であるルイスホソカタムシを1個体確認することが出来ました。



ルイスホソカタムシ

カメムシ目

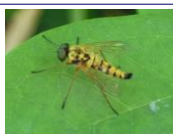
コナラの新葉にはクヌギトピカスミカメとキアシクロホソカスミカメが、ニガナにはタイワンヒゲナガアブラムシ、アケビにはベニキジラミがいました。その他、ムネアカアワフキ、チャバネアオカメムシ、マルカメムシなどを確認しました。



ベニキジラミ

その他

トンボ目はシオカラトンボ、バッタ目はヤブキリの幼虫とツチイナゴの2種、ナナフシ目はナナフシモドキ、トビケラ目もナミコガタシマトビケラだけでした。ハエ目では、キアシキンシギアブやフタホシヒラタアブなどを確認しました。ハチ目では、クロナガアリがやや珍しい種です。



キアシキンシギアブ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年5月②）

2022年5月16日 天候：くもり 調査者1名

スカッと快晴とは行きませんが、その分、調査しやすい気温でした。林縁のモチツツジも枯れ始め、一部の水田では水が入れられ、もうすぐ梅雨かという感じです。牛神池の水位は、最近の雨でやや上がりました。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類は、ナミアゲハ、ナガサキアゲハ、ヒメジャノメ、クロノマチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、キタテハなど、11種を確認しました。ガ類では、キモントガリメイガ、ギンツバメ、ウラベニエダシャク、キスジホソマダラなどを確認しました。



キモントガリメイガ

コウチュウ目

前回と同じく、カシナガの天敵とされるルイスホソカタムシを1個体確認しました。2個体のヨツモンカメノコハムシが、ヒルガオ科ではない植物上にいました。その他、ミヤマオビオオキノコ、エグリトラカミキリ、ヒトオビアラゲカミキリ、ウグイスナガタマムシなどを確認しました。



エグリトラカミキリ

カメムシ目

注目種のヤノクチナガオオアブラムシを撮影しましたが、写真はアカサシガメがホシヒラビロヘリカメムシを摂食しているシーンを選びました。ハリカメムシは、せんごくの杜で増えているのかもしれませんが、アオモンツノカメムシやホオズキカメムシなどの常連の種も確認しています。



アカサシガメ

その他

トンボ目ではギンヤンマ、バッタ目ではカヤヒバリ、カマキリ目ではオオカマキリの幼虫、ハエ目ではマダラアシナガバエやオオフタホンヒラタアブ、ハチ目では、右の写真のオオツマグロハバチ、カタアカチュウレンシ、セグロアシナガバチなどが、4月以降で初確認となりました。



オオツマグロハバチ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年5月③）

2022年5月22日 天候：晴れ 調査者1名

少し汗をかく気温になりました。樹木の緑が濃くなった分、ナラ枯れが目立ちます。例の牛神池近くのクヌギでは、カシノナガキクイムシの死体と、その天敵と言われるルイスホソカタムシを見つけました。



チョウ目 チョウ類16種

イシガケチョウは、自分の調査では、4年ぶりの確認です。吸水しながら、放尿していました。盛りの過ぎたモチツツジ上では、クロアゲハがモンキアゲハを追い払っていました。その他、ナガサキアゲハ、サトキマダラヒカゲ、クロノマチョウ、コムシジなどを確認しました。



イシガケチョウ

コウチュウ目

樹液には、ヨツボシオオキスイやヨツボシクシキスイが集まっていた。右の写真を撮っていると、その下に小型のヒラタクワガタが顔を出しましたが、気付いたとたんに引っ込みました。クリイロコガネやホシジロアシナガソウムシ以外は、常連の種ばかりでした。



ヨツボシオオキスイ

カメムシ目

ヤノクチナガオオアブラムシは幼虫だけでした。前回に書いたように、ハリカメムシには、よく出会います。もちろん、ホシハリカメムシもいます。ギンギシアブラムシが、ナガバギシギシの茎先に目立つようになりました。前は幼虫だったシマサシガメは、今回は成虫での確認でした。



ハリカメムシ

その他

トンボ目では、ギンヤンマ、ショウジョウトンボ、シオカラトンボのほか、羽化殻としてコフキトンボを確認しました。太い背棘と脚の縞模様が特徴です。他に書くとすれば、バッタ目のカヤヒバリの鳴き声と、営巣場所を探すセグロアシナガバチの女王が目立つことぐらいです。



コフキトンボ羽化殻

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年6月①）

2022年6月2日 天候：晴れ 調査者1名

ほとんどの水田に水が入りました。かなり暑くなり、昆虫全体の種数は増えてきましたが、トンボ目がギンヤンマ、シオカラトンボ、コシアキトンボだけなのは、やや寂しい結果でした。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類では、ナミアゲハ、モンキチョウ、サトキマダラヒカゲ、キタテハ、テングチョウなどを確認しました。ガ類では、ギンツバメやウススキクロテンヒメシャクなどを成虫で確認し、その他、クヌギの樹幹に「溶け込んだような」カシワマイマイの幼虫を確認しました。



ウススキクロテンヒメシャク

バッタ目など

バッタ目では、キンヒバリの鳴き声を今シーズン初めて聞きました。ナナフシ目ではナナフシモドキ、カマキリ目ではオオカマキリの幼虫、ゴキブリ目ではヒメクロゴキブリとモリチャバネゴキブリ、ハサミムシ目ではヒゲジロハサミムシを確認しました。



ヒメクロゴキブリ

カメムシ目

ギンギシアブラムシに加えて、セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシも増えてきました。ツマグロオオヨコバイ、アワダチソウグンバイ、ホシハラビロヘリカメムシなどの常連はいるものの、ここ2、3年、カメムシ科が少なくなったことが気掛かりです。



ギンギシアブラムシ

ハチ目

オオスズメバチが、クヌギの樹液を吸いに来ていました。今は、大型の甲虫がいないので、争いも起きません。写真は、何か餌を咥えているミカドツクリバチです。常連のアリとは別として、オオスアリとヨツボシオオアリは、せんごくの杜では、やや少ない種と言えます。



ミカドツクリバチ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年6月②）

2022年6月10日 天候：晴れ 調査者1名

梅雨入り間近の晴天です。水田への水入れは終わりました。でも、水田の上を飛ぶツバメは少なく、虫が少ないことが分かります。春先よりも花が咲いている草本の種は減りましたが、だからこそドクダミの花が目立ちます。



チョウ目 チョウ類14種

チョウ類は、ナミアゲハ、ヒカゲチョウ、コムシジ、キタテハ、アサマイチモンシ、ルリシジミなど13種の成虫と、イシガケチョウの幼虫を確認しました。ガ類では、ホタルガとカノコガが多く、その他、ヒメクロバを撮影することが出来ました。



イシガケチョウ幼虫

バッタ目など

バッタ目では、タイワンエンマコオロギの鳴き声を録音することが出来ました。ヤブキリの幼虫、キンヒバリ、ツチイナゴは、前回と同じです。バッタ目以外では、オオカマキリの幼虫、モリチャバネゴキブリ、ヒゲジロハサミムシ（卵塊を保護中）を確認しました。



ヒゲジロハサミムシ

カメムシ目

右の写真は、ツマグロオオヨコバイがササグモに捕食されているシーンです。ササグモのメスほどの個体も腹が膨れていました。ヤマハゼの枝にハゼアブラムシのコロニーが出来ていました。共生者はトビイロケアリです。今回もカメムシ科の確認はありませんでした。



ツマグロオオヨコバイ

コウチュウ目

緑色に輝くコガネムシは、丸まった葉に隠れて良い写真が撮れませんでした。シロテンハナムグリも出現し、梅雨入り前ですが、夏近しという感じです。黄色の四つ紋のナミテントウは、あまり見たことがないタイプです。右の写真は、せんごくの杜に多いナガゴマフカミキリです。



ナガゴマフカミキリ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年6月③）

2022年6月20日 天候：くもり 調査者1名

蒸し暑い梅雨時のくもり空の下、水が入った水田の上をツバメが低空飛行して餌を採っています。ドクダミの花などは盛時を過ぎました。林の中で目立つベニシダは、この時期にケバケバしいソーラス（孢子嚢）を付けます。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類は、ナミアゲハ、モンシロチョウ、ヒカゲチョウ、クロコノマチョウ、コムシジ、ヒメアカタテハ、ツマグロヒョウモン、ベニシジミ、ヤマトシジミなど11種を確認しました。ガ類では、ホタルガとカノコガの成虫、クロキシタアツバとキノコヒモミノガは幼虫を確認しました。



クロキシタアツバ幼虫

トンボ目

林縁の湿地でサラサヤンマのオスを確認しましたが、1回も止まってくれず、飛翔時のブレた写真を掲載します。キイトンボは今シーズン初め、1♂1♀を確認しました。その他、アオイトンボ、オオシオカラトンボ、シオカラトンボ、チョウトンボを確認しました。



サラサヤンマ

バッタ目

ヤブキリとキリギリスが鳴いていました。この他に、キンヒバリとナツノツツレサセコオロギの鳴き声を聞き、キンヒバリ以外は、今シーズン初です。ホシササキリとトンサマバッタは成虫になりました。成虫で越冬したクビキリギスのメスがとても綺麗だったのが印象に残りました。



トンサマバッタ

カメムシ目

早くもニイニゼミが2個体、鳴いていました。写真は、中国原産のハゴロモ科の外来種で、和名がまだありません。せんごくの杜では昨年から生息が確認されています。ヒシウカ科の不明種を除けば、イトカメムシ、マルカメムシ、クモヘリカメムシなどの常連の種だけの確認となりました。



ハゴロモ科の外来種

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年7月①）

2022年7月1日 天候：晴れ 調査者1名

早くも梅雨が明けました。今年の梅雨は6月14日頃から28日頃までの約2週間で、あっという間に終わってしまいました。元々、水位が下がっていた牛神池は、夏の間に干上がってしまうのではないかと心配です。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類は、モンシロチョウ、ヒカゲチョウ、コムシジ、アサマイチモンジ、ムラサキシジミ、ベニシジミ、コチャバナセセリなど11種を確認しました。ガ類では、緑色の棒が葉から突っ立っているようにしか見えないフタナミトビヒメジャクスの幼虫だけを確認しました。



アサマイチモンジ

トンボ目 9種

林内では、ハグロトンボが数匹、ゆったりと飛んだり、止まったりしていました。今シーズン初めて、ウスバキトンボを見ました。その他、アオイトンボ、キイトンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、チョウトンボ、コシアキトンボを確認しました。



ハグロトンボ

バッタ目

草むらではキリギリス、林縁ではナツノツツレサセコオロギとマダラスの鳴き声をよく聞きました。キンヒバリとカヤヒバリは少しだけ鳴いていました。ササキリ、クササキリ、エンマコオロギ、オンブバッタ属（たぶん「アカハネ」の方）の4種は、幼虫としての確認です。



ササキリ幼虫

カメムシ目

前回の調査で初鳴きだったニイニゼミに続いて、今回はクマゼミとアブラゼミの鳴き声を聞きました。アミガサハゴロモに似た外来種と、在来のアミガサハゴロモが同じ枝で混じって汁液を吸っていました（アカメガシワ上）。ツマグロスゲバを今シーズン初めて見ました。



ホシヘリカメムシ幼虫

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年7月②）

2022年7月11日 天候：晴れ／くもり 調査者1名

台風4号が通過して以降、気温がやや下がりました。クマゼミ、アブラゼミ（右の写真）、ニイニゼミの鳴き声が聞こえないと、本当の夏という感じがしません。水田では、イネの葉が伸び、緑色が濃く見えるようになりました。



ゴマダラチョウ

チョウ目 チョウ類15種

チョウ類は、ナミアゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ、アオスジアゲハ、ヒカゲチョウ、コムシジ、キタテハ、ゴマダラチョウ、ツバメシジミ、チャバナセセリなどを確認しました。ガ類は、マエキヒメジャクとマエアカスカシノメイガの2種を確認しただけでした。



トンボ目 9種

大井谷池の水位が高く、ウチワヤンマとコシアキトンボが止まる場所をめぐって争っていました。ショウジョウトンボとオオシオカラトンボも、お互いを意識する組み合わせなのかもしれません。キイトンボの数が、例年より少ないのが気になります。牛神池の水位低下のせいでしょうか？



ウチワヤンマ

コウチュウ目

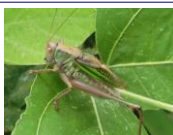
2013年以降、目にしていなかったコハンミョウを10個体程度確認しました。クワカミキリが、若いイヌビワの小枝の樹皮を食べまくっていました。クヌギの樹液まわりでは、コクワガタ、サトユミアシゴミムシダマシ、ヨツボシケシキスイなどを確認しました。



コハンミョウ

バッタ目

ショウリョウバッタとアカハネオンブバッタの一部は成虫になっていました。林縁の草深い場所からは、屋間ながら、ナツノツツレサセコオロギとコガタコオロギの鳴き声が聞こえます。ササキリ、オナガササキリ、エンマコオロギなどは、まだ幼虫でした。



キリギリス

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年7月③）

2022年7月21日 天候：晴れ／くもり 調査者1名

蒸し暑く、戻り梅雨と言って良い天候が続きます。水田の緑は濃くなりました。今年は、カマキリヤドリバエの卵付着カマキリをまだ見ていません。ここ20年来、記憶にないことです。右の写真はシナアブラギリの実です。



チョウ目 チョウ類13種

チョウ類は、ナミアゲハ、アオスジアゲハ、モンキチョウ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ツマグロヒョウモン、ムラサキシジミ、ヤマトシジミ、ツバメシジミ、ベニシジミを確認しました。ガ類は、シロスジトモエなどです。



アオスジアゲハ

トンボ目 8種

前回、キイトンボが少ないと書きましたが、今回は4個体を確認しました。ウチワヤンマも増えてきました。でも特に多かったのはシオカラトンボです。その他、アオイトンボ、ギンヤンマ、オオシオカラトンボ、チョウトンボ、ウスバキトンボを確認しました。



キイトンボ

バッタ目

クスノキの裁断された幹の下で、サトアリツカコオロギを確認しました。写真がピンボケで残念です。キリギリスは盛んに鳴いていますが、ヤブキリの鳴き声はしません。他に聞こえた鳴き声は、ナツノツツレサセコオロギです。アカハネオンブバッタは3個体とも緑色型でした。



ヤブキリ

カメムシ目

セミ類では、クマゼミとニイニゼミの鳴き声が多く、アブラゼミが続き、ツクツクボウシは少しだけでした。ミツボシツチカメムシは普通種ですが、草上を見るという調査方法では確認が少なくなるのでしょうか。ヨコツナサシガメはふ化したての小さな幼虫でした。



ニイニゼミ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年8月①）

2022年8月1日 天候：晴れ 調査者1名

正午の気温は36℃でした。**クマゼミ**、**アブラゼミ**、**ニイニゼミ**の鳴き声が聞こえます。いったん整備した外周路が草ぼうぼうです（右の写真）。ナラ枯れの木は、おおかた伐採されて、雑木林の茶色が目立たなくなりました。



チョウ目 チョウ類9種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**アオスジアゲハ**、**キタキチョウ**、**モンシロチョウ**、**コムシジ**、**ツマグロヒョウモン**、**ウラギンシジミ**、**ムラサキシジミ**、**ヤマトシジミ**を確認しました。いずれも個体数は少なく、しかも活発に飛翔するので、写真を撮るのに一苦労しました。



コムシ

トンボ目 10種

シオカラトンボがとにかく目立ちます。次いで、**ウスバキトンボ**と**オオシオカラトンボ**です。右の写真の**ウチワヤンマ**は、太陽光が当たる面積を少なくするために倒立していました。**チョウトンボ**は4個体、**キイトンボ**、**ハグロトンボ**、**クロスジギンヤンマ**は、それぞれ1個体でした。



ウチワヤンマ

コウチュウ目

サトコミアシゴミムシダマシ、**ヒメナガシゴミムシダマシ**、**ルリゴミムシダマシ**、**ナミクチクムシ**といったゴミムシダマシ科を多く確認しました。水田では、**ヒメガムシ**が泳いでいました。右の写真は自然遊学館に標本がなかった食材性の**セマダラナガシクイ**です。体長は13mm。



セマダラナガシクイ

ハチ目

青緑の光沢色をした**ムツバセイボウ**は、珍しい種ではありますが、自然遊学館に標本がありませんでした。**トビイロケアリ**や**ウメマツオオアリ**などの5種の常連のアリ以外では、**ベッコウバチ**、**スズバチ**、**サトシガバチ**、**コガタスズメバチ**を確認しました。



スズバチ

「千石荘」昆虫調査速報（2022年8月）

2022年8月13日 天候：晴れ 調査者1名

湿度の高い日が続き、体にこたえます。日本各地で線状降水帯が発生し、被害が報道されているのに、貝塚市は本日に雨が降りません。堤に割れ目が入って水位が下がっていた牛神池が、さらに干上がってきました。



チョウ目 チョウ類6種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**キタキチョウ**、**サトキマダラヒカゲ**、**コムシジ**、**ムラサキシジミ**、**コチャバナセセリ**を確認しました。**サトキマダラヒカゲ**が2個体で、その他は1個体です。チョウ類が飛翔して活動するには、暑すぎるのかもしれません。



コチャバナセセリ

トンボ目 5種

シオカラトンボは暑さに強いことが分かります。**キイトンボ**は、牛神池で5個体を確認しましたが、先に述べたように、水位の低下が気になります。その他にいたのは、**アオイトンボ**、**オオシオカラトンボ**、**ウスバキトンボ**で、**ウスバキトンボ**は10個体ほどが群れていました。



キイトンボ

バッタ目

ショウリョウバッタも暑さに強く、灼熱の地面でも耐えられるようです。**イボバッタ**と**クルマバッタモドキ**も同様ながら、**ショウリョウバッタ**の多さには敵いません。**キリギリス**は、ススキなどの草の影で鳴いています。**サトクダマモドキ**が成虫になりました。**ツチイナゴ**は幼虫です。



クルマバッタモドキ

カメムシ目

ツクツクボウシ、**ニイニゼミ**、**アブラゼミ**が鳴いていました。写真は、サクラ類の葉裏にいた**ナシグンバイ**の幼虫と成虫の群れとどちらにしようか迷ったのですが、細かすぎるので止めにしました。その他、**マエジロオオヨコバ**や**ニセヒメクモヘリカメムシ**などを確認しました。



ツクツクボウシ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年8月③）

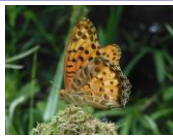
2022年8月20日 天候：くもり／晴れ 調査者1名

さらに水位が下がった牛神池にも**リスアカネ**（右の写真）が来ていました。調査終了間際に、柳原浩良さんを隊長とする自然遊学館の**タイワンエンマコオロギ**調査隊5人と合流し、水田のそばで雌雄を採集しました。



チョウ目 チョウ類14種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**ナガサキアゲハ**、**アオスジアゲハ**、**モンキチョウ**、**クロノマチョウ**、**サトキマダラヒカゲ**、**ゴマダラチョウ**、**ツマグロヒョウモン**、**イチモンジセセリ**、**チャバナセセリ**、**コチャバナセセリ**などを確認しました。セセリチョウの仲間が増えてきました。



ツマグロヒョウモン

バッタ目

ショウリョウバッタモドキは幼虫と成虫が半々でした。**エンマ**、**タイワンエンマ**、**ハラオカメ**、**モリオカメ**、**ミツカド**、**タンボ**といったコオロギ類の鳴き声を聞きました。このうち、**モリオカメ**以外は、先に述べた調査隊が採集しました。**カンタン**や**カナタタキ**も鳴き始めました。



ショウリョウバッタモドキ

カメムシ目

セミ類は、**ツクツクボウシ**、**アブラゼミ**、**ニイニゼミ**、**クマゼミ**、**ミンミンゼミ**の鳴き声を聞きました。**ヨコツナサシガメ**は幼虫で、**アカサシガメ**は成虫でした。カクレミノの幹に止まっていた**キマダラカメムシ**は、せんごくの杜ではあまり見ないという印象があります。



アカサシガメ

その他

サツマヒメカマキリの幼虫を1個体確認しました。体長は4mm程度でした。**コハンミョウ**は2個体と減りましたが、まだ繁殖期だと確認できました。**タイワンタケクマバチ**を探り逃がしたのが残念です。昆虫以外では、用水路で、**トノサマガエル**の写真を撮ることができました。



サツマヒメカマキリ幼虫

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年9月①）

2022年9月2日 天候：晴れ 調査者1名

イネの穂が実り始めました。雨後のため、やや蒸し暑い調査となりました。それでも暑さのピークは過ぎたようです。今年は6月下旬に梅雨が明けたと以前に書きましたが、昨日、気象庁によって7月下旬に訂正されました。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、**ナガサキアゲハ**、**アオスジアゲハ**、**キタキチョウ**、**ヒメウラナミジャンヌ**、**サトキマダラヒカゲ**、**イチモンジセセリ**、**チャバナセセリ**を確認しました。半数以上が**イチモンジセセリ**でした。ガ類では、写真の**コシロシタバ**のほか、**ホシボウジャク**の幼虫を確認しました。



コシロシタバ

バッタ目

ケヤキ広場近くで、**クルマバッタ**の褐色型♀を確認しました。2015年の「千石荘講座」以来の確認です。樹上からは**クサヒバリ**、**アオマツムシ**、**カナタタキ**、地上からは**エンマコオロギ**、**ハラオカメコオロギ**、**ツツリサセコオロギ**、**マダラスズ**などの鳴き声が聞こえました。



アカハネオンプバッタ

カメムシ目

セミ類は、**ツクツクボウシ**、**アブラゼミ**、**ニイニゼミ**、**ミンミンゼミ**の鳴き声を聞きました。右の写真は、ガガイモの莖にいた**キョウチクトウアブラムシ**です。数株状で見られました。和名のとおり、キョウチクトウにも寄生します。その他、常連のカメムシ亜科を確認しました。



キョウチクトウアブラムシ

その他

ハチモドキハナアブを見たのは、2013年以来的ことです。それまでは毎年見ていたので、突然の「復活」に驚きました。以前と同じクヌギの木で、その木では、**コクワガタ**1♂1♀も樹幹で活動していました。牛神池は、水位がやや回復し、**キイトンボ**や**リスアカネ**がいました。



ハチモドキハナアブ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年9月②）

2022年9月13日 天候：晴れ 調査者1名

イネの垂れた穂の上空では、**ウスバキトンボ**が少し群れていました。池の堤に咲いたノアズキ（右の写真）に**タイワンタケクマバチ**が吸蜜に来ていましたが、前々回と同じく、撮影できませんでした。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**モンシロチョウ**、**ヒメウラナミジャノメ**、**ルリタテハ**、**ツマグロヒョウモン**、**ヤマトシジミ**、**イチモンジセセリ**を確認しました。ガ類では、**ムナブトヒメスカシバ**は、自然遊学館に標本がない種ですが、2020年と同じく、撮影だけで済ませてしまいました。



ムナブトヒメスカシバ

バッタ目

樹上からは**クサビバリ**、**アオマツムシ**、**カナタタキ**、地上からは**エンマコオロギ**、**ハラオカメコオロギ**、**ツツレサセコオロギ**、**マダラスズ**、**キリギリス**などの鳴き声が聞こえました。**オナガササキリ**、**ホシササキリ**、**セスジツムシ**の幼虫などは目視で確認しました。



セスジツムシ幼虫

カメムシ目

ツクツクボウシが盛んに鳴いていて、写真も撮れるし、ジョロウグモに捕えられた個体もありました。あとは**ニイゼミ**が少し鳴いていました。**ヨコツナサシガメ**と**シマサシガメ**は幼虫でした。マダケと**オオホシカメムシ**の組み合わせは不思議です。写真には**ツマグロスケバ**を選びました。



ツマグロスケバ

その他

トンボ目は**アオイトトンボ**、**ギンヤンマ**、**コシアキトンボ**などで、目ほしいものはおらず、カマキリ目は**ハラヒロカマキリ**だけでした。ゴキブリ目は**モリチャバネゴキブリ**と**ヒメクロゴキブリ**ともに幼虫でした。アミメカゲロウ目も**イツボシアカマダラクサカゲロウ**だけでした。



ハラヒロカマキリ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年9月③）

2022年9月24日 天候：晴れ 調査者1名

イネの穂が前回よりも垂れていました。所々倒れているのは台風のせいかもしれません。林内では、**アオダイショウ**を1個体確認しました。せんごくの杜に通い始めて30年弱になりますが、不思議なことに見たのは初めてです。



チョウ目 チョウ類13種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**キアゲハ**、**アオスジアゲハ**、**キタキチョウ**、**ヒメジャノメ**、**ヒカゲチョウ**、**サトキマダラヒカゲ**、**コムシジ**、**ウラナミシジミ**、**チャバネセセリ**などを確認しました。ガ類では、**オオタバコガ**の幼虫や**ギンツバメ**、**シロオビノメイガ**などを確認しました。



ギンツバメ

トンボ目

マユタテアカネ（翅の先端が透明なタイプ）と**キイトンボ**は林縁に、**リスアカネ**は林内の池にいました。大きな池の岸辺では、**ギンヤンマ**のオス3個体がなわばり争いをしていました。その他、**シオカラトンボ**、**オオシオカラトンボ**、**ウスバキトンボ**を確認しました。



マユタテアカネ

バッタ目

ツチイナゴの個体数が断トツで多く、その他、水田の周辺では、**オナガササキリ**、**ウスイロササキリ**、**ショウリョウバッタモドキ**、**コバネイナゴ**、**アカハネオンブバッタ**などがいました。**エンマ**、**オカメ2種**、**ツツレサセ**、**マダラスズ**、**クサビバリ**、**アオマツムシ**の鳴き声を聞きました。



モリオカメコオロギ

その他

カシノナガキクイムシが穴のそばにいました。生きている成虫も見ることができるようになりました。カマキリ目は、**オオカマキリ**2個体、**チョウセンカマキリ**1個体、**コカマキリ**1個体を確認しました。セミの鳴き声は、**ツクツクボウシ**が多く、**ニイゼミ**は少数でした。



カシノナガキクイムシ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年10月①）

2022年10月2日 天候：晴れ 調査者1名

青空の下、稲は収穫を待っています。キノコを研究している吉田元三郎さんに会い、カエントケ（右の写真）の場所を教えてくださいました。その枯れたコナラの根元に、昨年から生え出したそうです。



チョウ目 チョウ類16種

チョウ類は、**イチモンジセセリ**と**ウラナミシジミ**の個体数が多く、その他、**ナミアゲハ**、**ナガサキアゲハ**、**モンキチョウ**、**ヒカゲチョウ**、**クロコノマチョウ**、**コムシジ**、**ツマグロヒョウモン**、**ウラギンシジミ**、**ムラサキシジミ**、**ヤマトシジミ**、**チャバネセセリ**などを確認しました。



ナミアゲハ

トンボ目

ウスバキトンボの個体数は前回よりも減りました。目が悪くなり、**アオモンイトトンボ**や**アオイトトンボ**をなかなか追えません。**キイトンボ**と**リスアカネ**は林内の池に、大きな池の岸辺には**クロスジギンヤンマ**がいました。その他、**シオカラトンボ**と**オオシオカラトンボ**を確認しました。



リスアカネ

バッタ目

地面、草間、樹上から、いろいろな鳴き声が聞こえます。歳のせい、ササキ類の鳴き声が聞き取りにくくなりました。耳鳴りで**シバズ**の鳴き声が聞こえなくなったはずなのに、今日は不思議と聞こえます。写真は**サトクダマキモドキ**のメスです。林縁に生息する種です。



サトクダマキモドキ

その他

セミの鳴き声をまったく聞きませんでした。**ヒメジュウジナガカメ**の集団は小さめでした。林内では、**オオスズメバチ**と**コガタスズメバチ**の活動が盛んです。倒木をどかすと、**カブトムシ**の幼虫、**ナミクチキムシ**、**ルリゴミムシダマシ**、**ヒゲジロハサミムシ**などがいました。

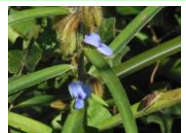


ヒメジュウジナガカメムシ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年10月②）

2022年10月13日 天候：晴れ 調査者1名

半分ほどの水田が稲刈りを終え、残りの水田では刈り入れ作業が行われていました。池の堤では、夏からタヌキマの花が咲いていたのですが、なかなか紹介する機会がありませんでした。増えてほしい植物です。



チョウ目 チョウ類8種

チョウ類は、**キアゲハ**、**キタキチョウ**、**クロコノマチョウ**、**ツマグロヒョウモン**（幼虫も）、**テングチョウ**、**ウラギンシジミ**、**ウラナミシジミ**、**チャバネセセリ**を確認しました。**ウラナミシジミ**の個体数が圧倒的に多いのはとまかく、その次が**クロコノマチョウ**なのは少しビックリです。



ツマグロヒョウモン幼虫

バッタ目

ツチイナゴの多さと**コオロギ**類の構成は、前回と変わります。**アオマツムシ**が減り、**カンタン**や**クサビバリ**の鳴き声がやさしく響きます。稲刈りが済んだ水田から**コバネイナゴ**が畦に移動してきました。写真は、**カナタタキ**か、**セスジツムシ**のオスにするか、迷ってしまいました。



カナタタキ（♀）

カメムシ目

シロオビアワフキ、**トビイロウナカ**、**ツマグロオオコバイ**、**オオコバイ**、**ヨコツナサシガメ**の幼虫、**アカスジカスミカメ**、**ホソミドリカメ**、**クサギカメムシ**、**ホオズキカメムシ**、**クモヘリカメムシ**、**ホソハリカメムシ**など、普通種のオンパレードでした。



ホオズキカメムシ

コウチュウ目

伐採木の下に、**カブトムシ**の幼虫が多数。伐採木の下には菌食者も集まります。**サトコミアシゴミムシダマシ**（カエントケも平気みたい！）や**ルリゴミムシダマシ**は夏よりは少なくなりました。**ホソチビオキノコ**と思われるものは、時期的に見て、再同定が必要かもしれません。



サトコミアシゴミムシダマシ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年10月③）

2022年10月21日 天候：晴れ 調査者1名

青空の下、稲刈りが終わった水田の風景は、まさに日本の秋といった感じなのに、畦の一部では、外来種のマルバルコンソウ（右の写真）が生え出しました。ナルトサワギク、ランタナ、・・・と、数え出したら切りがありません。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、キタキチョウ、モンキチョウ、モンシロチョウ、クロコノマチョウ、ウラナミシジミ、ヤマトシジミ、イチモンジセセリを確認しました。ウラナミシジミが一番多いのは前回と同じですが、かなり数は減りました。写真が撮れたのはヤマトシジミだけでした。



ヤマトシジミ

バッタ目

ササキリ類は、林内から草むら・畦にかけて、ササキリ、オナガササキリ、ホシササキリ、ウスイロササキリの順序で出現します。その他、鳴き声を聞いたのは、クサヒバリ、カンタン、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、モリオカメコオロギ、マダラスズ、シバズ、カネタタキでした。



ササキリ

カメムシ目

畦に多いのは、アカスジカスミカメとトビイロウンカ属です。タイウンヒゲナガアブラムシがいましたが、植物は種が分かりませんでした。オオモンシロナガカメムシは林床での優占種なのに、今シーズン初めて、幼虫を見ました。写真はアオモンツノカメムシの集団を選びました。



アオモンツノカメムシ

その他

ハチ目では、セイヨウミツバチを一番多く見ました。写真のオオスズメバチは、この個体だけです。コウチュウ目ではカブトムシの幼虫が多く、その他はナナホシテントウの幼虫だけ、トンボ目ではオオアオイトトンボとアキアカネをそれぞれ1みだけ確認しました。



オオスズメバチ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年11月①）

2022年11月5日 天候：晴れ 調査者1名

マルバアメリカアサガオが咲いていて、まだ外来種が増えたかと思っていたら、ミヤマホオジロ（オス）という自分では初見の鳥を見て、気を直しました。頭部と喉元の黄色が美しい冬鳥です。



チョウ目 チョウ類4種

チョウ類は、キタキチョウ、モンシロチョウ、キタテハ、ウラナミシジミを確認しました。意外なことに、キタテハの写真を撮るのは、今年初めてでした。ガ類では、フクラスズの幼虫、クロキシタアツバの幼虫、およびオオウンモンクチバを確認しました。



キタテハ

トンボ目 3種

今回は写真を撮り損ねたアキアカネですが、今回はボタン池の堤で2個体のオスが鉄杭の先を取り合っていたので、撮影が楽でした。その他、リスアカネとオオアオイトトンボを1個体ずつ確認しました。リスアカネは、右手の甲に止まったのですが、左手だけでは撮影できません。



アキアカネ

カメムシ目

畦では、アカスジカスミカメに加えて、ウスモンミドリカスミカメも増えてきました。ツマグロハギカスミカメも確認しました。ただ、クスノキに付く外来カスミカメは、今年は確認していません。写真は、オオヨコバイ（白枠内は幼虫）を選びました。



オオヨコバイ

その他

種数ではハエ目の11種が最多でした。右の写真は、ルリミズアブです。ハナアブ類はかなり減りました。その他、越冬前のオオスズメバチの女王や、アンペライに産み付けられたオオカマキリの卵囊などを確認しました。鳴き声での確認は、クサヒバリ、カンタン、カネタタキなどです。



ルリミズアブ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年11月②）

2022年11月11日 天候：晴れ 調査者1名

ケヤキ広場から入ると、いきなりソウシチョウの群れに出会いました。鳴き声は美しいのですが、特定外来生物に指定されている帰化鳥です。大井谷池（右の写真）の周囲には、ガガイモの実が成っていました。



チョウ目 チョウ類8種

チョウ類は、キタキチョウ、モンシロチョウ、クロコノマチョウ、キタテハ、ムラサキシジミ、ヤマトシジミ、ウラナミシジミ、チャバネセセリを確認しました。ガ類は幼虫のみの確認で、キノコヒモミノガ、フクラスズメ、クロキシタアツバ、ナシケンモンの4種でした。



ナシケンモン幼虫

トンボ目 3種

右の写真は、アンペライに止まったオオアオイトトンボのオスです。牛神池では、ほかにリスアカネのオスも確認しました。それぞれ1個体です。ボタン池の堤では、アキアカネのオス3個体とメス1個体が出て、前回の3種と同じ種を確認したことになります。



オオアオイトトンボ

カメムシ目

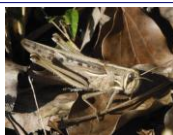
目単位では最多の15種を確認しましたが、普通種ばかりです。ツマグロオオヨコバイ、オオヨコバイ、シロミヤクイチモンジヨコバイと書いていけば分かります。これらはヨコバイ亜目で、カメムシ亜目では、アカスジカスミカメ、イトカメムシ、クモヘリカメムシと続きます。



ミナミアオカメムシ

バッタ目

樹上からはクサヒバリとカネタタキ、地面からはマダラスズ、シバズ、ハラオカメコオロギ、ツツレサセコオロギの寂しげな鳴き声が聞こえます。草の上で一番多く見かけるのはツチイナゴで、ほとんどの個体が太陽光を垂直に受けるように体を傾けていました。



ツチイナゴ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年11月③）

2022年11月22日 天候：晴れ／くもり 調査者1名

気温は20℃を超え、ジャンパーを脱ぎ、腕まくりして調査しました。右の写真のヤブチョロギをはじめ、オオニシキソウ、アメリカヒルガオ、マルバルコンソウなど、10年前にはなかった外来植物が元気いっぱいです。



チョウ目 チョウ類4種

チョウ類は、キタキチョウ、キタテハ、ツマグロヒョウモン、ウラナミシジミを確認しました。ツマグロヒョウモンのメスは、産卵場所を探しているように、地面近くを歩いていた。ガ類は、前回と同じく幼虫のみの確認で、フクラスズメとチャミノガの2種でした。



フクラスズメ幼虫

バッタ目

前回との違いは、ホシササキリとトノサマバッタの確認程度です。草上からは、カネタタキとクサヒバリの鳴き声が聞こえ、地面からは、ハラオカメコオロギ、マダラスズ、シバズの鳴き声が聞こえます。ツチイナゴのほとんどの個体は、体を傾けて「日光浴」をしていました。



ホシササキリ

カメムシ目

シデザクラの幹に外来種のビワコブオオアブラムシがいるのは、4日前の「千石荘講座」で確認していました。二色の市民の森で10日前に確認されたのが、貝塚市初記録だと思っています。その他、アカスジカスミカメ、オオヨコバイ、ヨコツナサシガメなどの普通種を確認しました。



ビワコブオオアブラムシ

その他

調査開始後すぐに、オオスズメバチから警告を受けました。リュウキュウアサガオ上で、外来種のヨツモンカメノコハムシを5個体、確認しました。トンボ目では、アキアカネのオスが1個体だけいました。カマキリ目は、オオカマキリとハラヒロカマキリの卵囊を確認しました。



ヨツモンカメノコハムシ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年12月①）

2022年12月2日 天候：晴れ 調査者1名

天気予報では「寒くなる」と言っていました。が、ぼか陽気です。でも、鳴く虫はツツレサセコオロギとマダラスズだけになりました。サネカズラ（右の写真）、ガガイモ、ヒサカキ、クマノミズキなどの実が成っていました。



チョウ目 チョウ類3種

チョウ類は、キタテハ、ヤマトシジミ、イチモンジセセリを1個体ずつ確認しただけに終わりました。キタテハは飛翔中で止まらず、残りの2種は日光浴をしていました。ガ類も、キノコヒモミノガの幼虫とフクラスズメの幼虫が1個体ずつでした。



キノコヒモミノガ幼虫

カメムシ目

樹幹に出来た蟻道の中で、ヤノクチナガオオアブラムシの幼虫と成虫、およびトビロケアリが活動していました。右の写真のアブラムシは尻から甘露を出しています。その他、ヨコツナサシガメの幼虫、アカスジカシミカメ、ウスモンミドリカシミカメなどを確認しました。



ヤノクチナガオオアブラムシ

コウチュウ目

放置された農地に繁茂したリュウキュウアサガオの葉上に、ヨツモンカメノコハムシの成虫3個体と蛹1個体がいきました。ナナホシテントウは2個体、ヨモギハムシは3個体でしたが、それより圧倒的に多かったのは、伐採木の下にいるカフトムシの幼虫です。



ヨツモンカメノコハムシ蛹

ハエ目

右の写真はヨモギの茎にヨモギクキコブタマハエが作った虫こぶです。ヨモギには、この他にも、ヨモギワタマハエとヨモギシロクフシタマハエが虫こぶを作っていました。ベッコウハエは前回と同じコナラの樹液にいて、その他、オオクロハエやクロヒラタアブ属を確認しました。



ヨモギクキコブタマハエ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年12月②）

2022年12月10日 天候：晴れ 調査者1名

正午の気温は16℃です。まったく寒くありません。林縁ではモスの高鳴きが響き、上空ではトビが旋回しています。10種ほどの花が咲いていました。写真は、コセンダングサの花に付いたガガイモの種子と綿毛です。



チョウ目 チョウ類3種

チョウ類は、キタキチョウ、キタテハ、ウラナミシジミを確認しました。キタキチョウの写真は撮れましたが、ガガイモの実の中に潜り込んでいたオオタバコガの幼虫（緑色型）を掲載しておきます。尻が穴から見えていました。キノコヒモミノガの幼虫は、前回と同じ枯木にいました。



オオタバコガ幼虫

バッタ目など

バッタ目は、クビキリギス、ツツレサセコオロギ、シバズ、マダラスズを確認しました。クビキリギスは、今期初です。シバズとマダラスズは鳴き声による確認です。カマキリ目では、ハラビロカマキリの卵囊、ハサミシ目では、ヒゲジロハサミシの幼虫を確認しました。



クビキリギス

カメムシ目

イセリアカイガラムシやツノロウムシがいると、冬だなど思うのですが、先ほども書いた通り、寒くありません。林縁では、ホシヒメヨコバイの群飛が見られました。その他、ウスモンミドリカシミカメ、ミナミアオカメムシ、アオモンツノカメムシなども活動していました。



イセリアカイガラムシ

その他

アカアカネを1匹確認しました。体色はかなりくすんでいました。コウチュウ目ではカフトムシの幼虫とニジュウヤホシテントウ、ハエ目ではキゴシハナアブとオオクロハエなど、ハチ目ではツマアカベッコウとトビロケアリを確認しました。



ツマアカベッコウ

「せんごくの杜」昆虫調査速報（2022年12月③）

2022年12月25日 天候：晴れ 調査者1名

コンボが放置され、外周路が整地されていました。林縁では、フユイチゴの実がたくさん成っていました（右の写真）。その他の赤い実は、サネカズラとナンテンです。サネカズラの虫こぶは、種類が分かりませんでした。



チョウ目 チョウ類3種

エノキの根元の落葉に、ゴマダラチョウの幼虫がいきました。エノキの場所が分かっているので、すぐに見つかりました。あとは、フユイチゴを撮影していた時に飛び出したキタキチョウと、外周路を弱々しく飛んでいたウラナミシジミを1個体ずつ見ただけでした。



ゴマダラチョウ幼虫

カマキリ目など

カマキリ目は、ハラビロカマキリとオオカマキリの卵囊を確認しました。トンボ目、バッタ目、ナナフシ目がゼロなのはともかく、期待していたカメムシ目も、ヨコツナサシガメの幼虫とツノロウムシの2種だけの確認に終わりました。



ハラビロカマキリ卵囊

ハエ目など

アカムシユスリカは自然遊学館に標本がないのに、以前、写真撮影だけで済ませてしまったことがありました。今回は採集しました。その他、ハエ目では、オオクロハエとヨモギワタマハエ（虫えい）、ハチ目では、トビロケアリと不明種1種を確認しました。



アカムシユスリカ

その他の動物

林内の道で、不意に動物に出会い、びっくりしました。疥癬病に罹ったタヌキでした。せんごくの杜で出会うタヌキは、病気に罹った個体が多いように思います。大井谷池とボタン池ではカイツブリとアオサギが見られず、鳥類観察は期待外れでした。



タヌキ